高松市埋蔵文化財調査報告 第５４集

高松市内遺跡発掘調査概報

－平成１２年度国庫補助事業－

２００１年3月

高 松 市 教 育 委 員 会

例　言

1．本書は，高松市教育委員会が平成１２年度に国庫補助事業として実施した高松市内遺跡発掘調査事業の概要報告書である。

2．本書には平成１２年度の調査のうち調査期間平成12年４月から12月にかけて実施した公共工事にともなう確認調査１件，民間開発に伴う確認調査２件のほか平成１１年度に史跡天然記念物屋島基礎調査事業として行った埋蔵文化財の確認調査について収録した。

3．調査は高松市教育委員会文化部文化振興課　文化財専門員　川畑　聰，同　山元敏裕，同　大嶋和則が担当した。

4．本書の執筆は各調査担当者が行い，全体編集は山元が行った。

5．本書の挿図の一部に国土交通省国土地理院発行の２万５千分の１地形図を使用した。

6．調査の実施にあたっては，香川県教育委員会文化行政課，屋島寺，四国森林管理局香川森林管理事務所，環境省自然保護局高松自然保護官事務所の指導・協力を得た

目　次

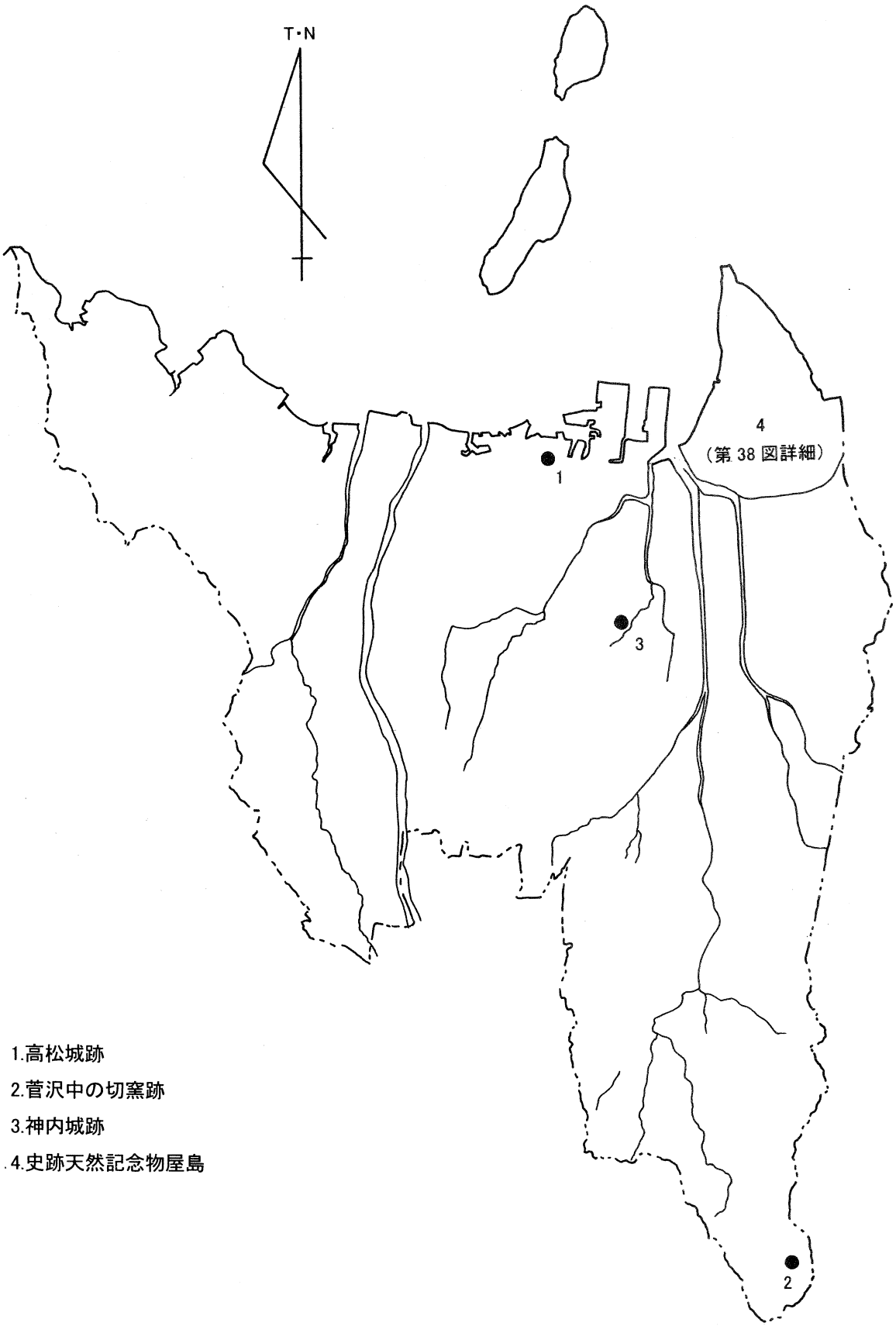
第１章　　高松市内遺跡発掘調査事業 …… 1
高松城跡 …… 2
菅沢中の切窯跡 …… 6
神内城跡 …… 9
第２章　　史跡天然記念物屋島基礎調査事業 …… ２２
平成１１年度発掘調査　第１調査地点（北嶺）…… ２３
平成１１年度発掘調査　第２調査地点（南嶺）…… ２７

挿図目次

第 1図　平成１２年度高松市内遺跡発掘調査事業
調査地位置図……1
第 2図　高松城跡調査地位置図……2
第 3図　トレンチ配置図……2
第 4図　第１トレンチ平面図……4
第 5図　第１トレンチ土層柱状図……4
第 6図　高松城跡出土遺物実測図……5
第 7図　菅沢中の切窯跡調査地位置図……6
第 8図　調査地位置詳細図……8
第 9図　窯跡平面図……8
第10図　窯跡立面図……8
第11図　窯跡断面図……8
第12図　神内城跡調査地位置図……9
第13図　調査地位置図……9
第14図　周辺の遺跡分布図……10
第15図　調査区平・断面図……11
第16図　ＳＤ－１出土石製紡錘車……12
第17図　ＳＢ－１平・断面図……13
第18図　ＳＢ－２平・断面図……13
第19図　ＳＤ－１平・断面図……14
第20図　ＳＤ－１出土遺物実測図……14
第21図　ＳＤ－２～４出土遺物実測図……14
第22図　ＳＤ－７平・断面図……15
第23図　ＳＤ－７出土遺物実測図……15
第24図　ＳＫ－１，ＳＫ－２平・断面図……16
第25図　ＳＫ－１出土遺物実測図……16
第26図　ＳＫ－３平・断面図……16
第27図　ＳＫ－３出土遺物実測図……16
第28図　ＳＫ－４平・断面図……17
第29図　ＳＫ－４出土遺物実測図……17
第30図　ＳＫ－５平・断面図……17
第31図　ＳＫ－５出土遺物実測図……17
第32図　ＳＫ－６出土遺物実測図……17
第33図　ＳＫ－６平・断面図……18
第34図　ＳＫ－７出土遺物実測図……18
第35図　ＳＫ－７，ＳＫ－８平・断面図……18
第36図　ＳＫ－９出土遺物実測図……18
第37図　ＳＰ出土遺物実測図……19
第38図　史跡天然記念物屋島基礎調査事業
調査地位置図……22
第39図　第１調査地点トレンチ配置図……23
第40図　第１トレンチ遺構図……23
第41図　第１トレンチ内石列平・断面図……24
第42図　第１トレンチ出土遺物実測図……24
第43図　第２トレンチ遺構図……25
第44図　第２トレンチ出土遺物実測図……26
第45図　表採遺物実測図……26
第46図　第２調査地点トレンチ配置図……27
第47図　第１トレンチ平・断面図……28
第48図　第２トレンチ平・断面図……29
第49図　第２調査地点出土遺物実測図……29

写真目次

写真 1　礎石検出状況……4
写真 2　断面状況……7
写真 3　完掘状況……7
写真 4　神内城跡調査区全景(北から)……21
写真 5　ＳＫ－３完掘状況(西から)……21
写真 6　ＳＤ－７完掘状況(北から)……21
写真 7　ＳＤ－７出土金属類……21
写真 8　ＳＤ－７出土土器類……21
写真 9　石製紡錘車……21
写真10　第１トレンチ石列検出状況……30
写真11　第２トレンチ完掘状況(北から)……30
写真12　礎石建物跡検出状況……30
写真13　集石遺構検出状況……30
写真14　第１トレンチ完掘状況……30
写真15　第２トレンチ完掘状況……30



第１図　平成 12 年度高松市内遺跡発掘調査事業調査地位置図

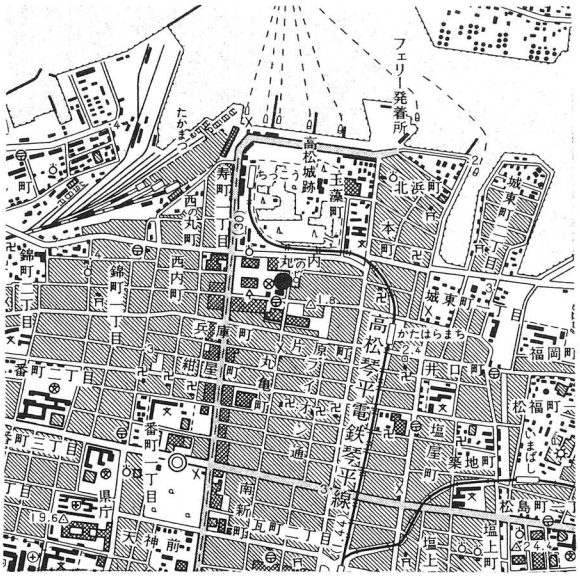
高松城跡（たかまつじょうあと）

1. 調　査　地　高松市丸の内
2. 調 査 期 間　平成 12 年 7 月 13・14 日
3. 調査担当者　大嶋和則
4. 調査の原因　ビル建設
5. 調査結果の概要

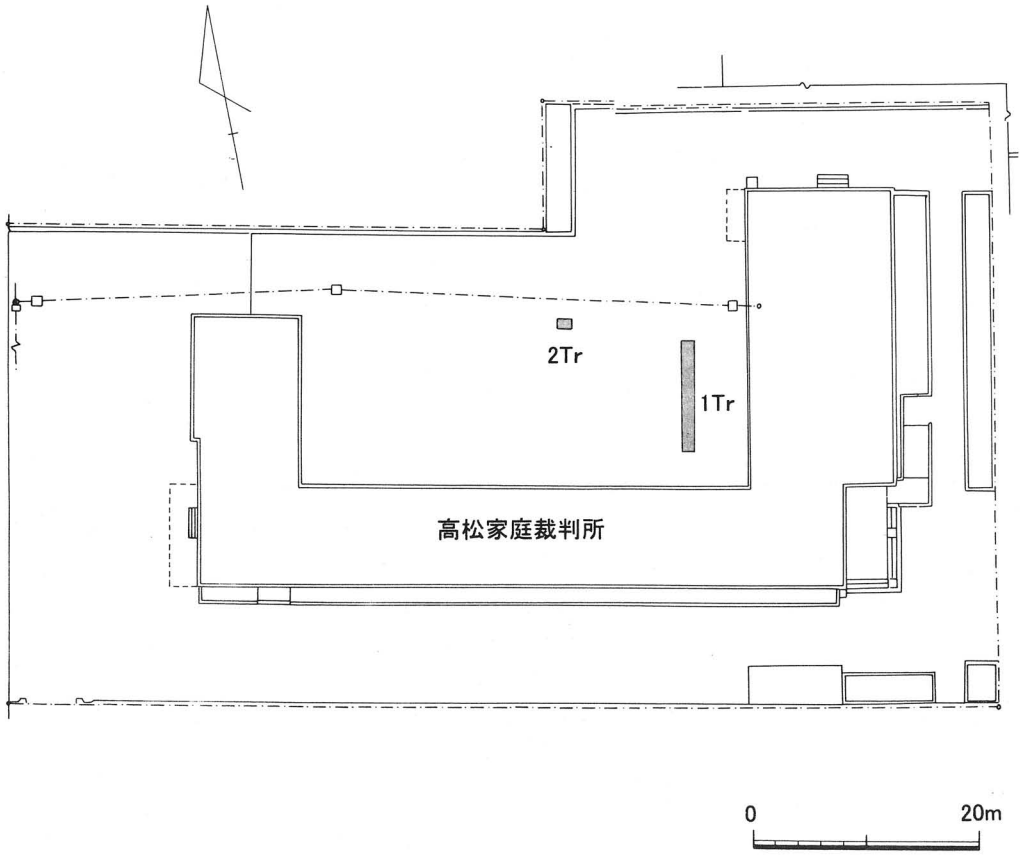
試掘調査は現状で調査できる 2 箇所のみで行った。南側のトレンチを第 1 トレンチ，北側を第 2 トレンチとした。第 1 トレンチでは地表面下において複数面の遺構面を検出した。

地表面下約 40 ㎝で検出した第 1 遺構面では漆喰を廃棄した土坑，柱穴等を検出した。出土遺物から幕末～明治頃のものと考えられる。

地表面下約 80 ㎝で検出した第 2 遺構面では礎



第2図　高松城跡調査地位置図



第3図　トレンチ配置図

石を確認した。確実なものとしては2個であるが，同方向に6個石が並んでおり，束柱や礎石の支えに使用していた石の可能性がある。出土遺物は瓦がほとんどで，詳細な時期決定はできないが，第1遺構面と第3遺構面の間であることから19世紀前半頃と考えられる。

第2遺構面で検出した礎石を残した状態で，礎石の無いトレンチ南端部分のみ掘削して地表面下約105㎝で第3遺構面を検出した。東西方向の溝2条と井戸1基を検出した。井戸は円形で木枠の井戸である。出土遺物から18世紀末～19世紀初頭頃と考えられる。

地表面より続いていた整地層は地表面下約120㎝でなくなり，自然堆積層（砂層）に変わった。地表面下約2.2mでは砂礫層にかわり，以下は無遺物層となることを確認した。

また，第2トレンチはコンクリートが多く1㎡しか調査できなかったため，深く掘削することができず第3遺構面までの調査となった。調査面積が狭いため遺構も第2遺構面でしか検出していないが，第1遺構面から第3遺構面までそれぞれ第1遺構面と同じレベルで整地面を確認しており，第1遺構面と同様に遺構の広がりを想定できる。

試掘調査結果一覧（第1トレンチ）

遺構面	時　期	深さ	遺　構	遺　物	備　考
第1面	幕末～明治	40㎝	土坑，柱穴	瓦，陶磁器	整地面を確認
第2面	19世紀前半	80㎝	礎石	瓦，陶磁器	整地面を確認
第3面	18末～19初頭	105㎝	溝，井戸	瓦，陶磁器	整地面を確認

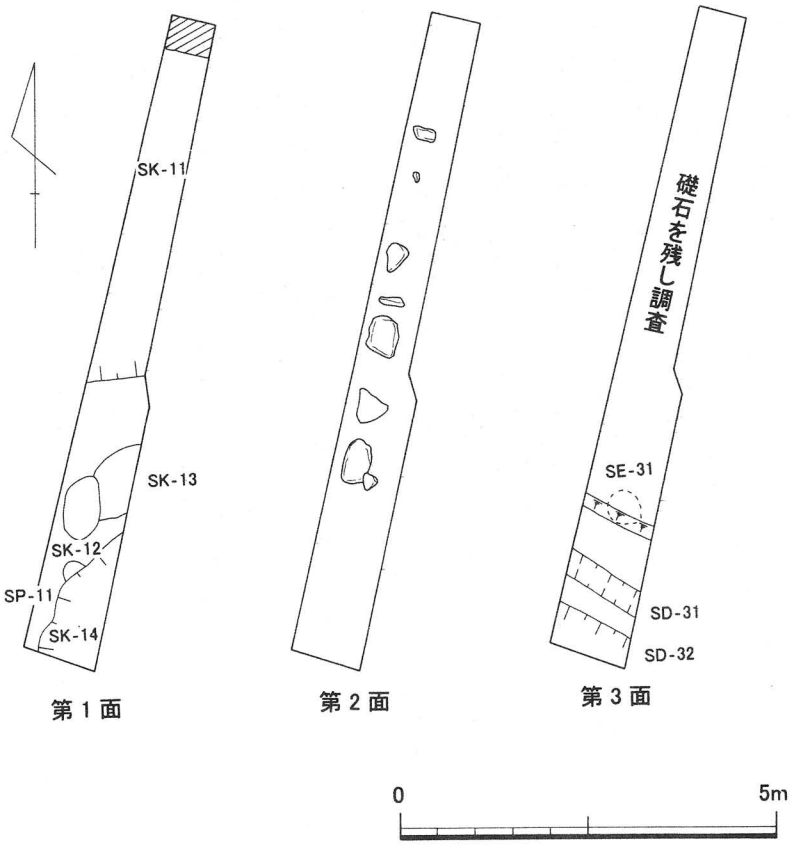
試掘調査結果一覧（第2トレンチ）

遺構面	時　期	深さ	遺　構	遺　物	備　考
第1面	幕末～明治	40㎝		瓦，陶磁器	整地面を確認
第2面	19世紀前半	80㎝	土坑	瓦	整地面を確認
第3面	18末～19初頭	105㎝		瓦，陶磁器	整地面を確認

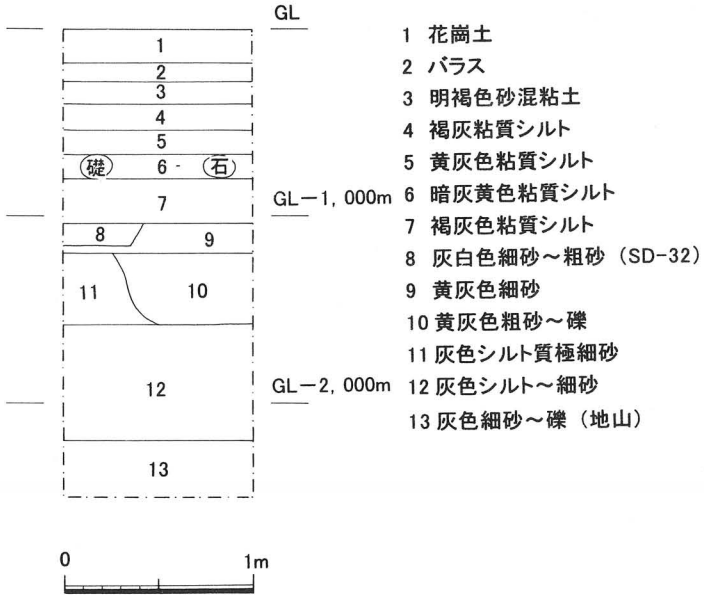
6．まとめ

今回の試掘箇所においては主に江戸時代の遺構・遺物を確認することができた。

しかしながら，試掘調査範囲が限定されていたため，開発予定地内全域における埋蔵文化財の状況については不明である。



第4図　第１トレンチ平面図



第5図　第１トレンチ土層柱状図

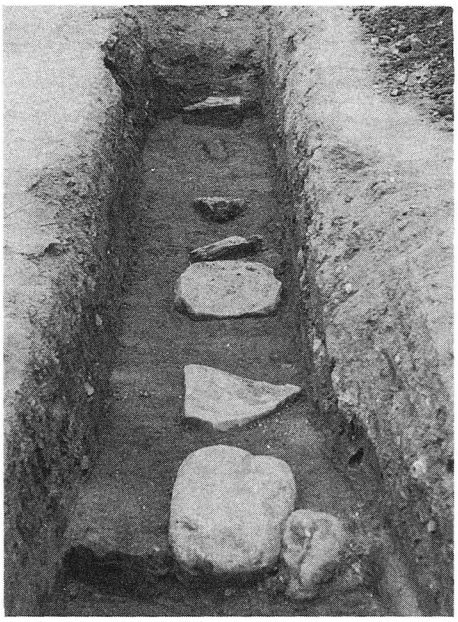
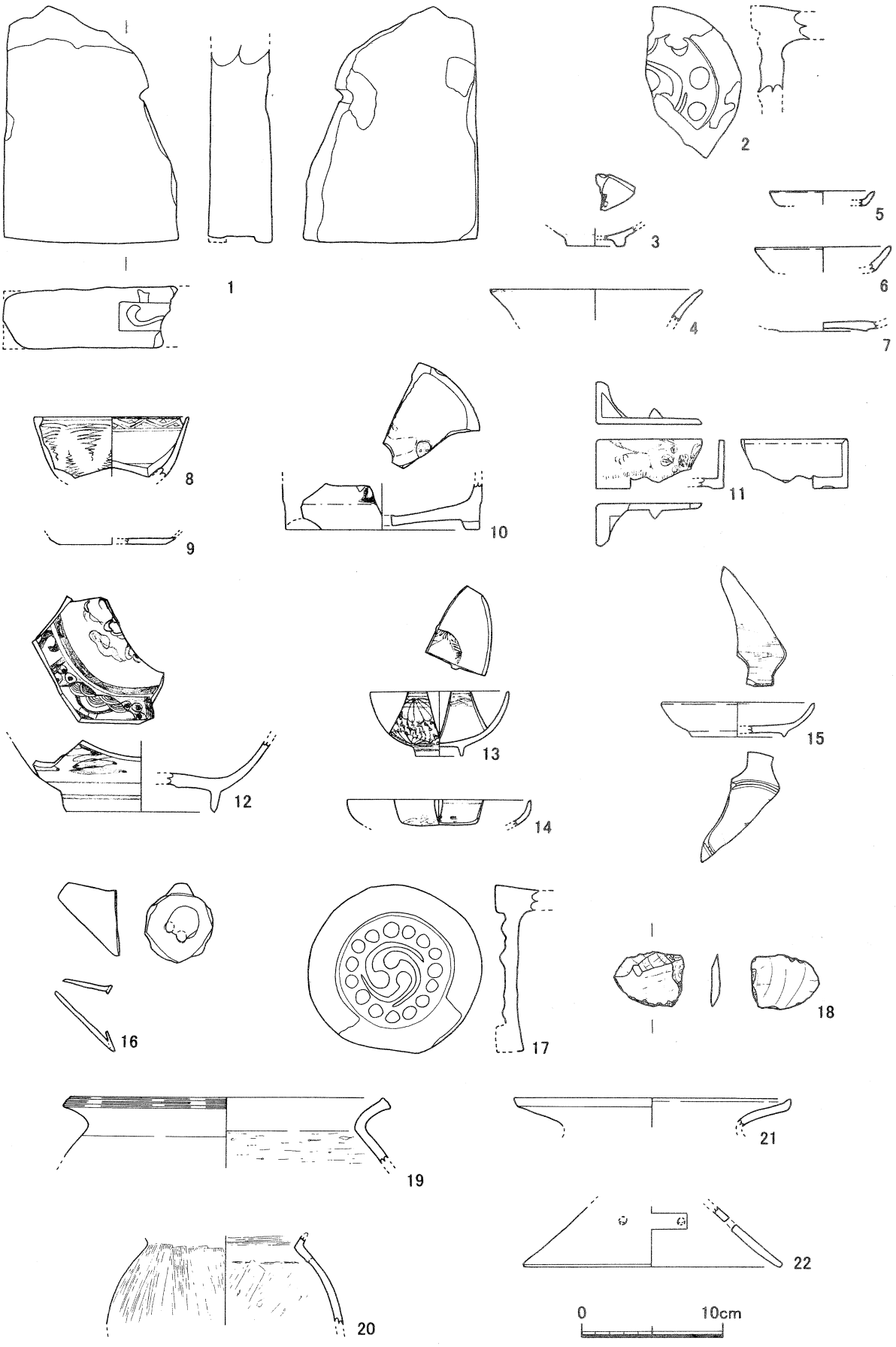


写真1　礎石検出状況

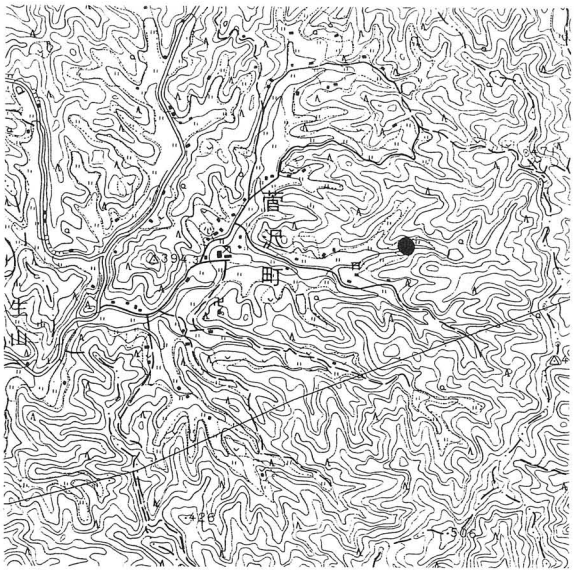


第 6 図　高松城跡出土遺物実測図(1～7＝包含層, 8～10＝SK11, 11～16＝SD32, 17～21＝砂層)

菅沢中の切窯跡（すげさわなか　きれようせき）

1．所　在　地　菅沢町445番地（宮谷柧谷中の切）
2．調 査 期 間　平成12年6月19日～20日
3．調査担当者　川畑　聰
4．調査の原因　道路建設工事
5．調査の内容

菅沢の地は，讃岐山脈の山間部に位置する小盆地である。柧谷（やなぎだに）池に通じる道路の建設工事中に，窯跡らしきものを発見したと土地所有者から連絡があった。現地で確認したところ，窯跡の可能性が高いことから，事前に確認調査を実施することになった。調査は，工事によって削られた斜面を中心に実施し，露呈した窯跡の範囲と内容の確認を目的とした。窯跡は，小盆地東の谷間に立地する。南東に面する斜面中腹に築かれ，標高は372mを測る。



第7図　菅沢中の切窯跡調査地位置図

調査は，窯跡埋土の掘削を実施するとともに，斜面に沿ってトレンチを設定・掘削し，窯跡の残存状況を確認した。その結果，窯跡奥壁部と煙道を検出するとともに，仮設道路下に窯跡床面が続いていることが明らかになった。ただし，天井部はすでに失われていた。

窯跡の特徴をまとめると，次のとおりである。

①窯跡は，花崗岩風化土の山腹を掘削して築かれている。
②窯跡の主軸は，南東－北西方向である。
③窯跡奥壁部の平面は半円形を呈し，内法で幅1.5m，高さ1.1m以上を測る。
④検出した長さは内法で1.3mであるが，全長は不明である。
⑤煙道が奥壁部中央に位置し窯底からまっすぐ上へのびる。
⑥窯壁は強熱を受けて須恵器窯なみに堅く焼き締まっている。
⑦窯壁の色調は側壁が暗赤褐色，床面が青灰色を呈する。
⑧天井部は，奥壁の形態から想定すると，ドーム状になっていたと考えられる。
⑨床面は，花崗岩を削って，平坦にしている。焚口に向かって緩やかに傾いている。

また，煙道の構築方法も特徴的である。それは，窯築造の際に，煙道部分も一緒に掘削した後に，約20㎝大の石と粘土を使って煙道と奥壁部の間に壁を作って，煙道（細いトンネル）を形成していることである。出土遺物は皆無であったが，窯の中には多量の炭が見られた。

6．調査成果の検討

a.使用目的

窯跡の使用目的については，出土遺物がないため，断定はできない。しかしながら，窯跡の状況などから，推測を試みたい。

①窯の中に多量の炭があるが，それ以外の焼成品は全くない。
②煙道の構築方法が，付近に点在する炭焼き窯と同じ技法である。
③菅沢は，炭焼きを生業の一つとした地域で，最盛期には30基以上あったという。

④５で列挙した特徴⑤⑥⑦は，他地域で発掘された白炭窯と類似している。
⑤民俗例（昭和時代前半）では，白炭窯の場合，床面に石を敷く。今回の窯跡も５の⑨のように，床面が岩盤である。

これらのことから，炭焼き窯でも白炭窯の可能性が考えられる。ただし，土地所有者の話では，「江戸時代，狼煙や花火をあげる火薬と混合する松炭を付近で焼いていた。」という伝承も残っており，松炭を焼いていた可能性も否定できない。

b.年代

出土遺物がないため，熱残留磁気測定など科学的手法をとらない限り，窯跡の年代については特定することができない。しかしながら，他遺跡の事例や付近に残る炭焼き窯との比較などから推測を試みたい。

①古代の白炭窯については，形態の変化が明らかになっている。つまり，８世紀では，奥壁部の平面形は直線で，窯の平面は長方形である。しかし，12世紀になると，奥壁は内湾するようになり，窯の平面形も扇形のものが出現する。今回の窯跡は，奥壁の平面形は12世紀のものと類似するが，窯の平面形は違うものと考えられる。
②付近に残る炭焼き窯は，明治時代から昭和30年代にかけて主に使用されたという。窯跡の平面は楕円形で，奥行が一丈（３m），幅が八尺（2.4m），高さが六尺（1.8m）というのが普通であるらしい。今回の窯跡と比較すると，平面や規模は違うが，煙道の構築方法は全く同一のものであり，近接した年代が想定される。
③土地所有者の話によれば，「父（95歳）は当該地に窯跡があったとは記憶していないし，先代からも窯跡を築いたとは聴いていない。また，明治時代の地図では，当該地は水田となっている。」このことから，窯跡は近世以前と考えられる。

以上のことから，今回調査した窯跡は，中世から近世にかけてのものと推定できる。

７．まとめ

菅沢中の切窯跡について，調査結果をまとめると，次のとおりである。
①窯跡は，南東に面する斜面に築かれ，主軸は斜面に直交する。
②奥壁部の平面は半円形で，内法で幅1.5m，高さ1.1m以上，長さ1.3m以上を測る。
③白炭もしくは松炭を焼いていた炭焼き窯の可能性がある。
④年代は，中世～近世と推定できる。

調査終了後，道路の路線を変更して窯跡を保存することになったため，土嚢袋で埋め戻しを行うなど必要な保護措置をとった。

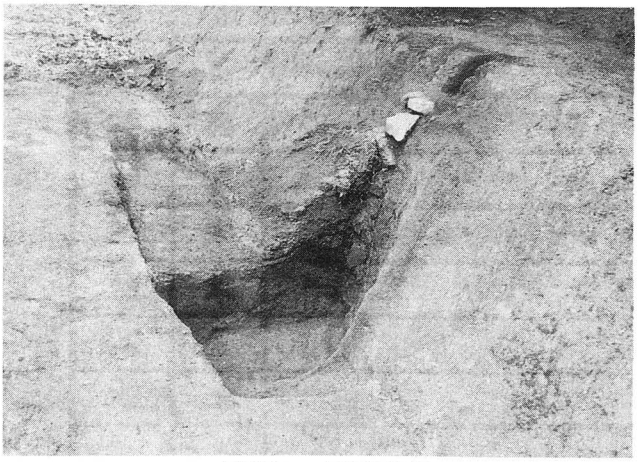


写真2　断面状況

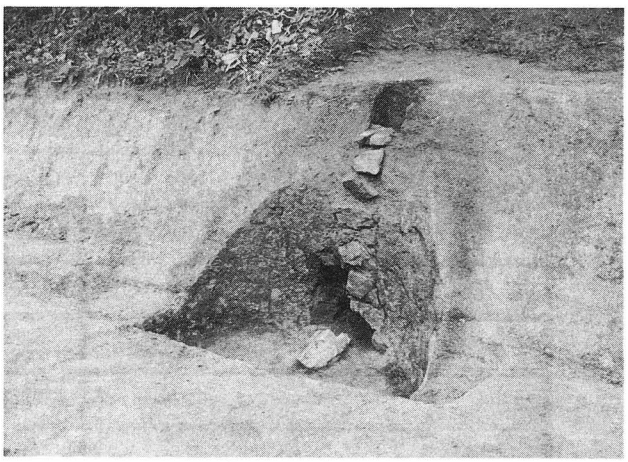
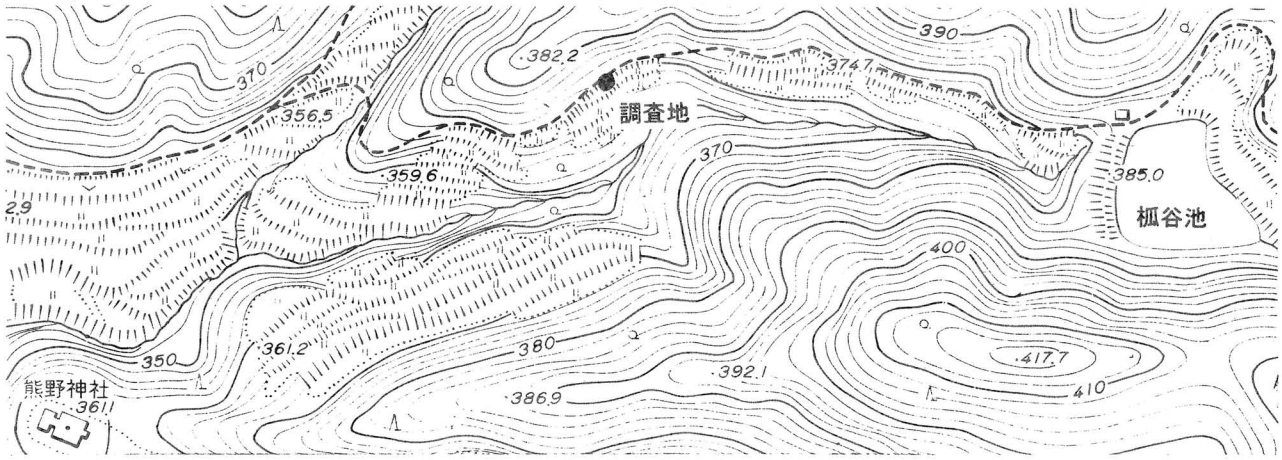
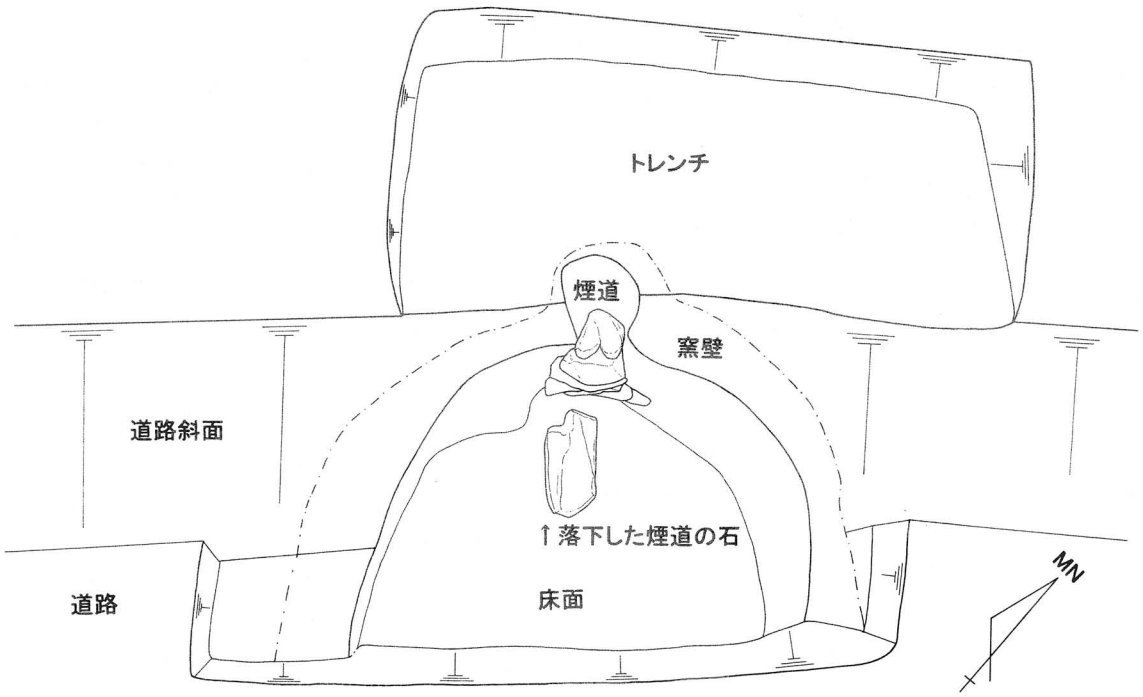


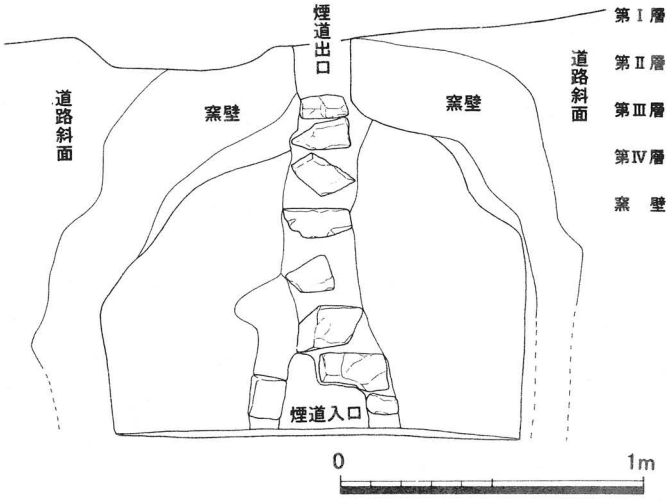
写真3　完掘状況



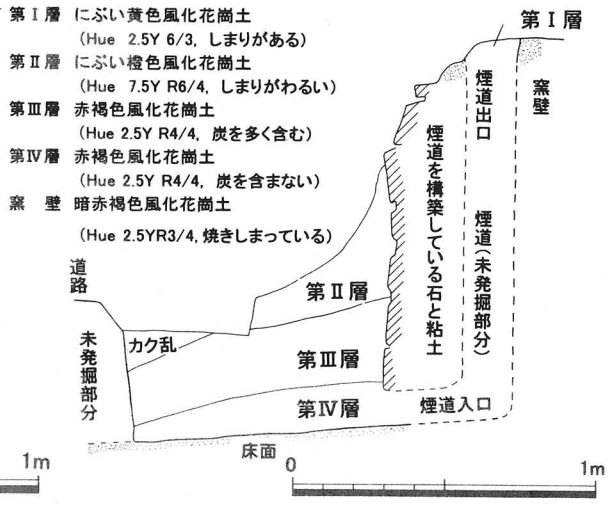
第8図　調査地位置詳細図(縮尺1/2,500)



第9図　窯跡平面図



第10図　窯跡立面図



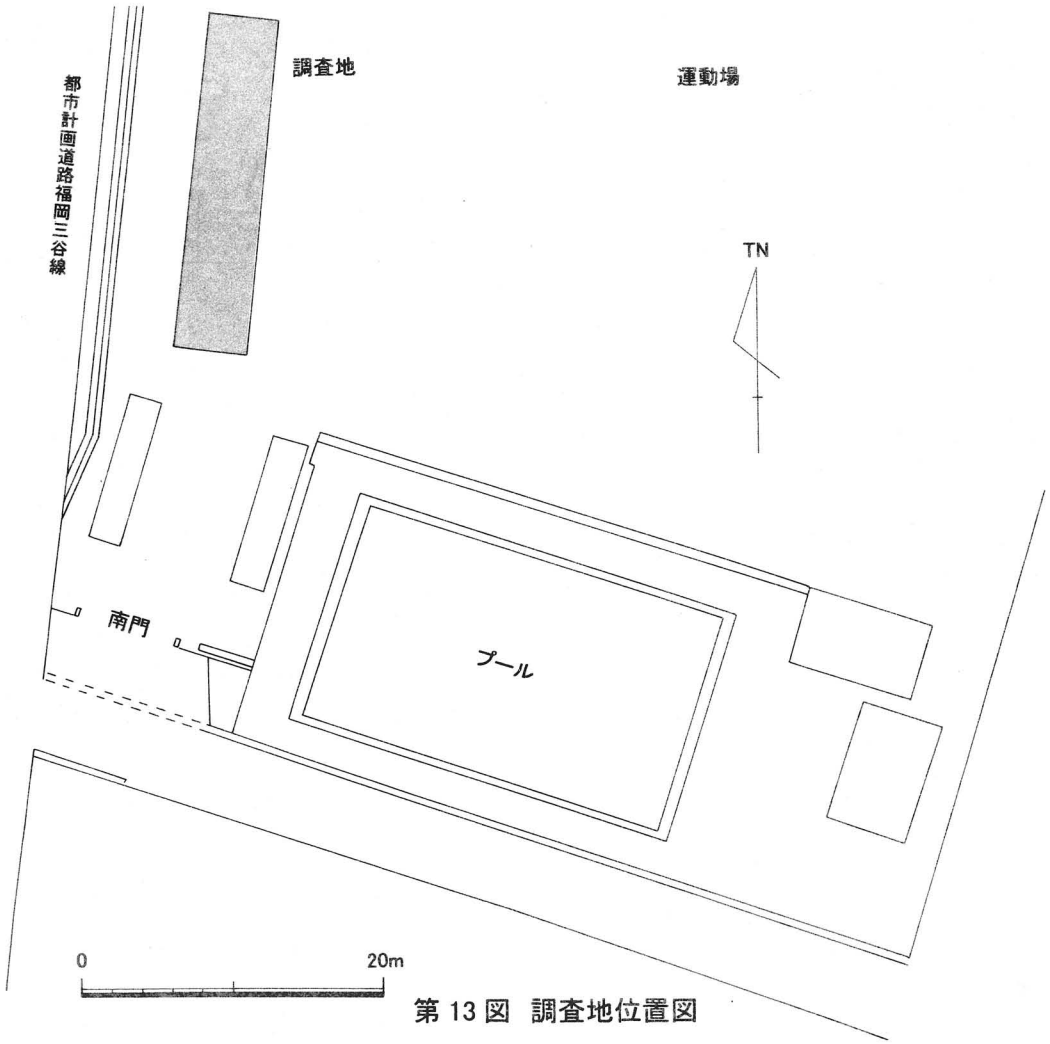
第11図　窯跡断面図

神内城跡（じんないじょうあと）

1. 調　査　地　高松市木太町
2. 調 査 期 間　平成 12 年 8 月 21 日～23 日
3. 調査担当者　大嶋和則
4. 調査の原因　防火貯水槽埋設
5. 調査の経緯

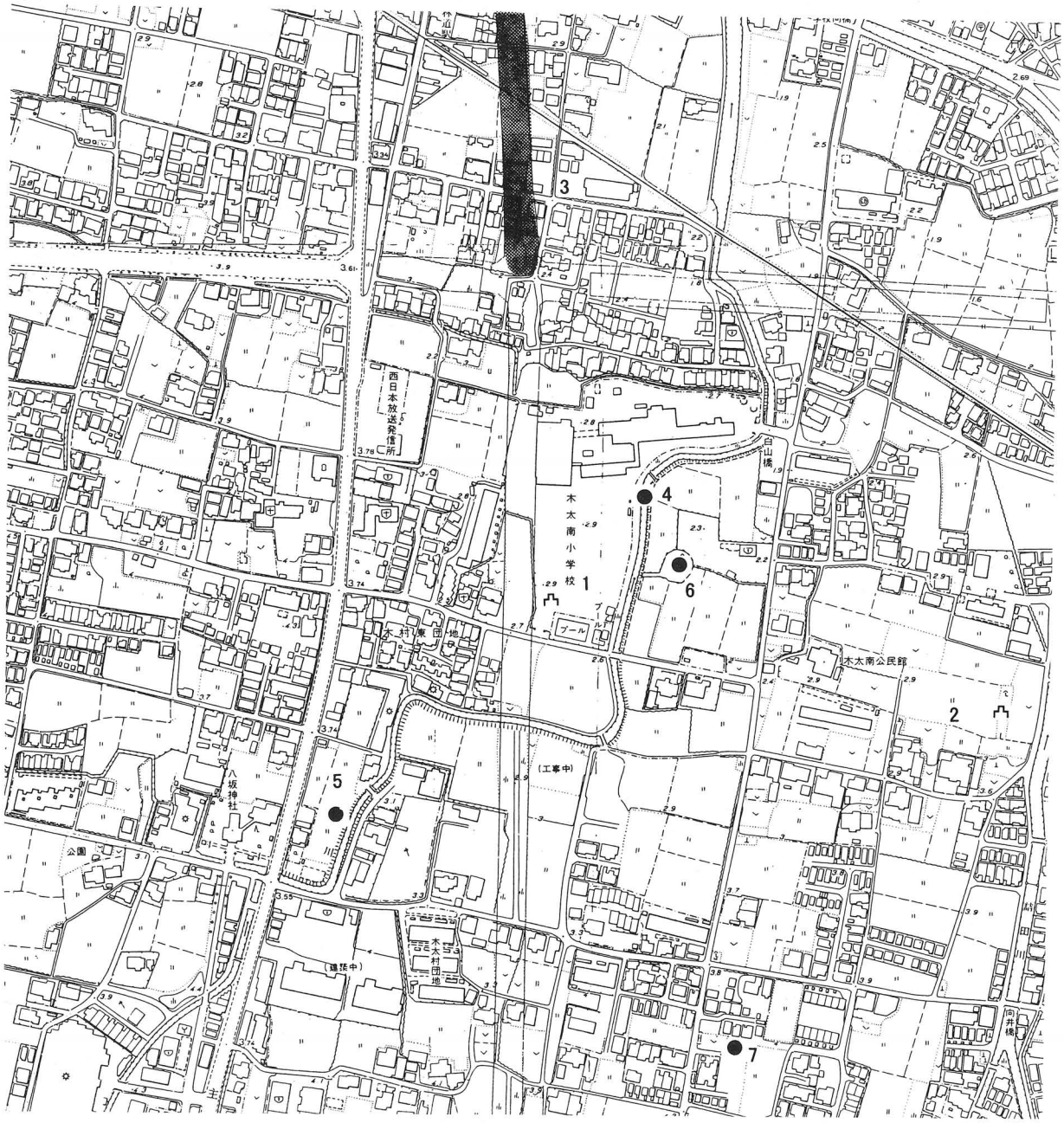
高松市消防局が木太南小学校の校庭において防火貯水槽埋設を計画しており，事前に埋蔵文化財の有無確認の依頼があった。同地は地元で「城屋敷」と呼ばれ，神内城跡とされてきた土地である。現状は木太南小学校の校庭となっており，城の全体像は不明であるが，宮川の流路を南と東の堀に見たて，150m 四方の城跡が推定されている（秋山 1982）。しかしながら，これまで発掘調査され

第 12 図　神内城跡調査地位置図



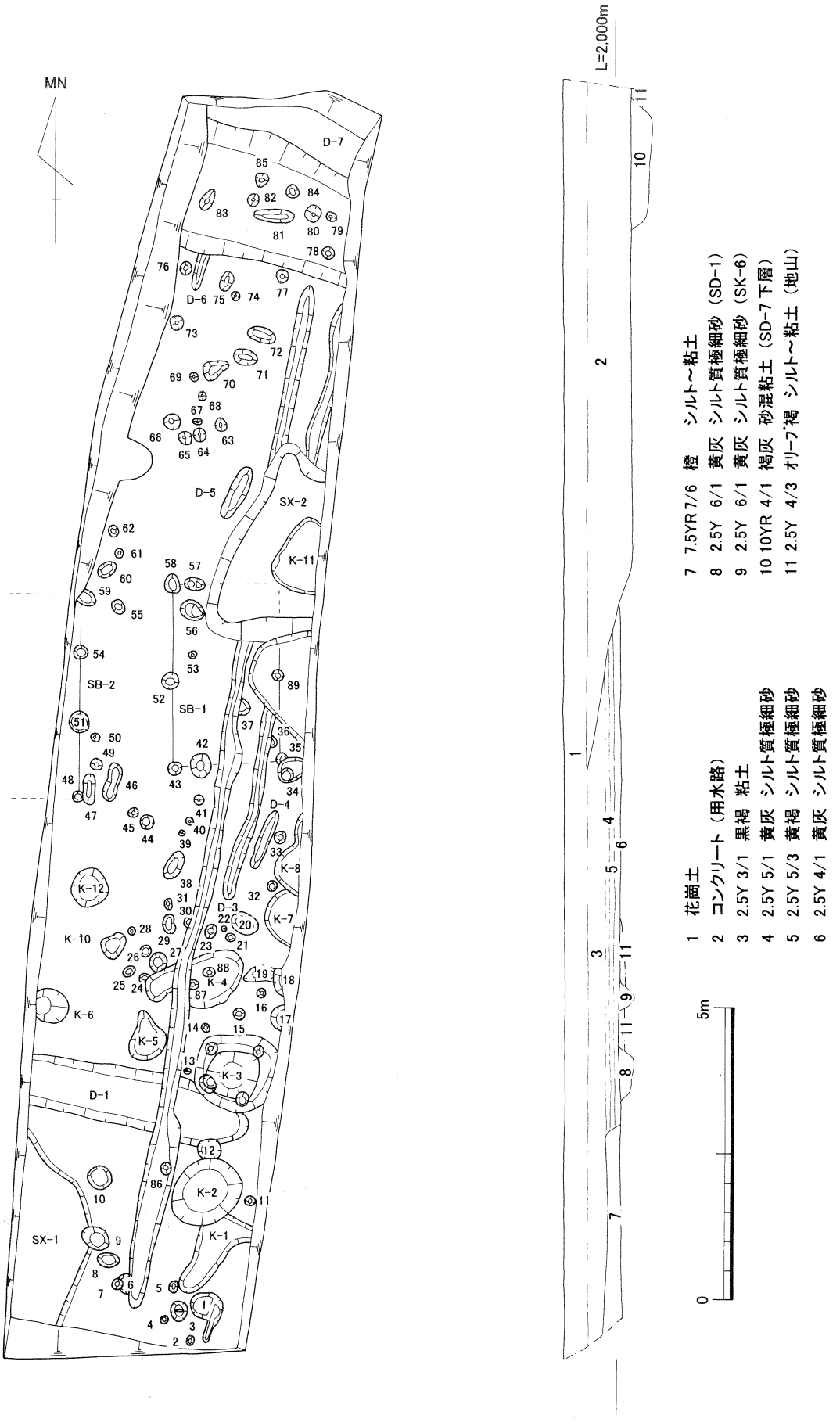
第 13 図　調査地位置図

たことは無く，神内城跡の範囲を確定させるために試掘確認調査が必要と考えられた。また，周辺には弥生時代の旧河道を検出した木太本村遺跡，奈良時代の井戸を検出した木太本村Ⅱ遺跡，弥生～近世の集落を検出した木太中村遺跡，古墳時代中期前半の円墳である白山神社古墳があり，これらの遺跡との関連も注目される地区である。木太南小学校と協議の結果，8 月 21 日～23 日の間に試掘確認調査をすることで合意を得，調査を行った。



第 14 図　周辺の遺跡分布図(S=1/5000 上が北)

1．神内城跡　　2．向城跡　　3．木太中村遺跡　　4．木太本村遺跡
5．木太本村Ⅱ遺跡　　6．白山神社古墳　　7．大荒神古墳



第 15 図 調査区平・断面図

6．調査の成果

(1) 調査の概要と基本層序

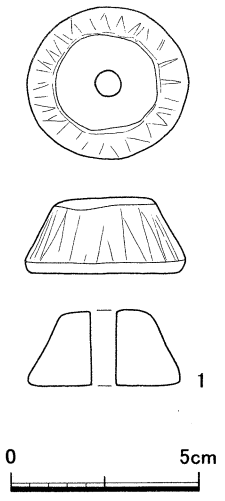
防火貯水槽予定地内の 82.5 ㎡において調査を行った。現況の運動場造成土である花崗土が地表面下約 40 ㎝まで続いている。花崗土の下では黒褐色のプラスチック廃材等を含む現代の粘土層を確認した。以下の黄灰色シルト質極細砂層は近世以降の水田層，黄褐色シルト質極細砂層はその床土と考えられる。その下層の黄灰色シルト質極細砂層は中世～近世の遺物を含む包含層である。包含層の下層はオリーブ褐色のシルト～粘土層で無遺物層となっていることから地山と考えられる。この地山の直上で遺構を検出したことから遺構面とした。遺構面の高さは標高 1.9～1.95m である。調査では掘立柱建物跡 2 棟，溝 7 条，土坑 12 基，ピット 89 基，不明遺構 2 基を検出した。

(2) 中世以前の遺構・遺物

調査で検出した遺構の大部分については中世後半の遺構と考えられるが，これらの遺構に切られた掘立柱建物 2 棟を検出した。中世の遺構の埋土が黄灰～褐灰色に対し，黒褐色の埋土であり，一瞥して見分けられる。また，中世～近世の遺構に見られる条里地割の方向とは異なる方位であることからも時期差があると考えられる。出土遺物が無いため，時期は不明であるが，周辺の遺跡の調査では弥生・古墳・奈良時代の遺構が検出されており，これらのどの時期かに属すると考えられる。また，混入品ではあるが，ＳＤ－１から石製紡錘車が出土している。

ＳＤ－１出土石製紡錘車

中世後半の東西方向の溝であるＳＤ－１の上層部分から出土した。直径 4.2 ㎝，高さ 2.0 ㎝である。全体に丸みをおび，外面に退化した鋸歯文が見られる。石材は片岩系のものを用いていると思われる。調査地の北東に白山神社古墳が存在していることから,周辺に同様の古墳が点在していた可能性や，集落が存在していた可能性を指摘できる。



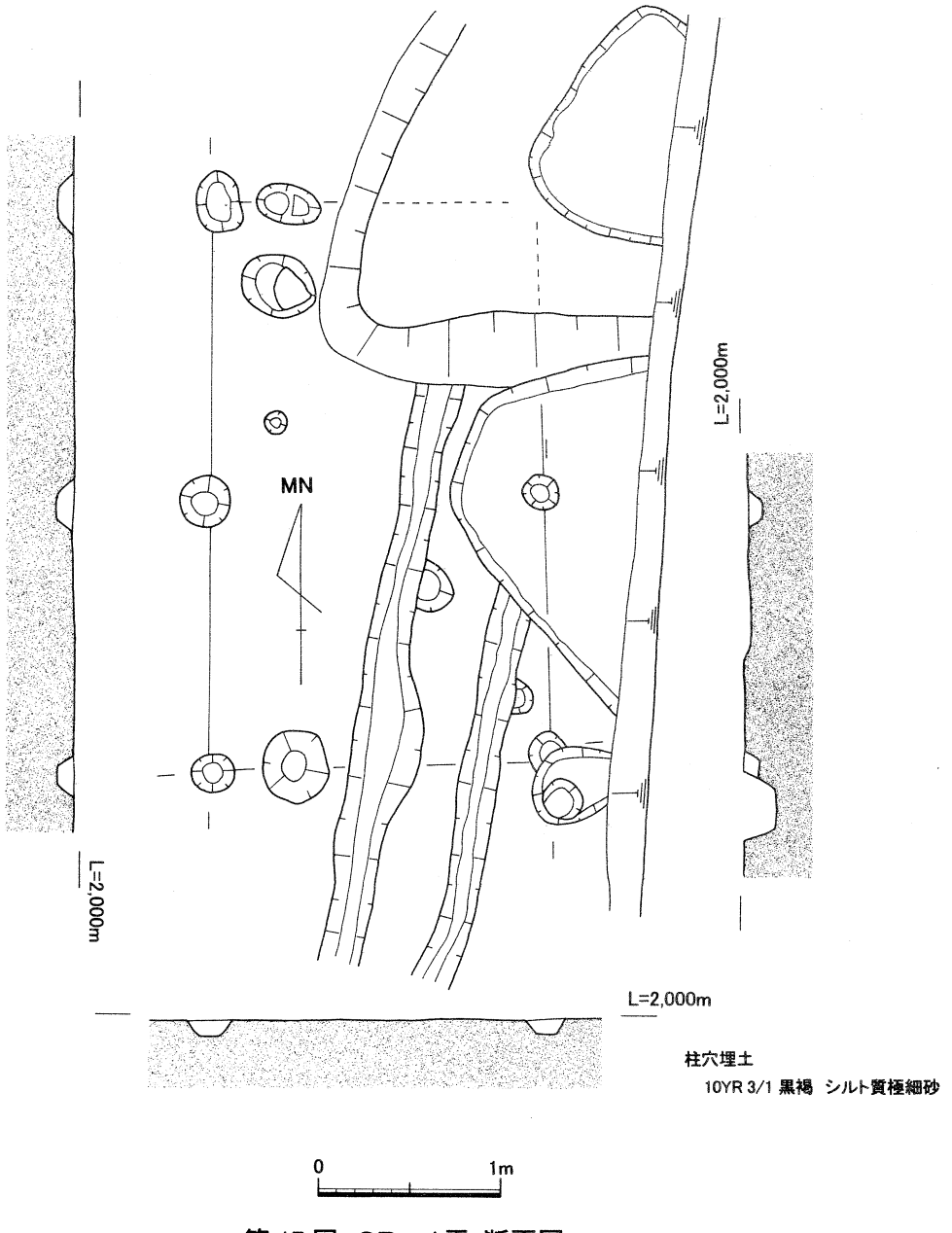
第 16 図SD－1出土石製紡錘車

ＳＢ－１

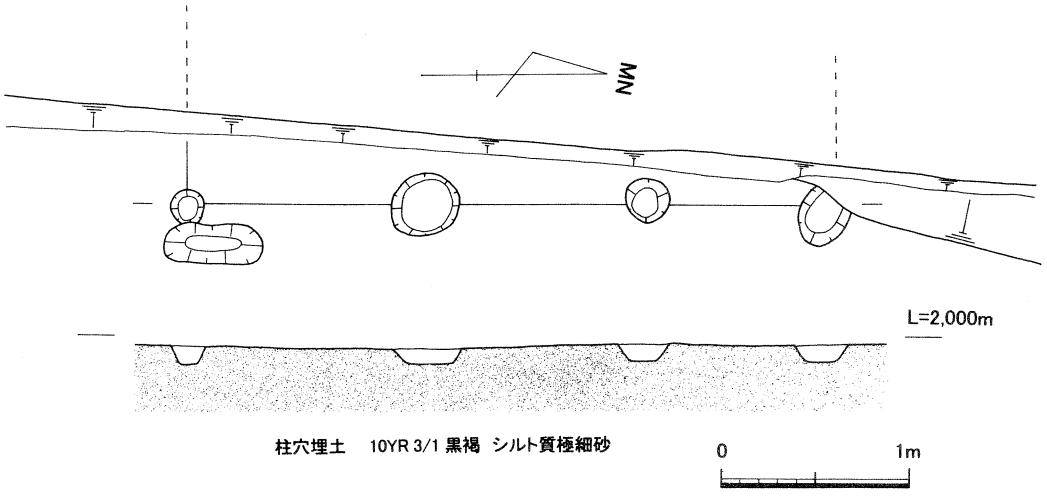
調査区中央で検出した東西 1 間（約 1.9m）×南北 2 間（約 3.1m），床面積約 5.89 ㎡の掘立柱建物跡である。南北の柱間は南側が約 1.45m，北側が 1.65m である。柱穴埋土は黒褐色のシルト質極細砂である。遺物は出土していないため，時期は不明である。中近世の地割とは少し方位が異なっており，遺構の切り合いから中世以前と考えられる。

ＳＢ－２

ＳＢ－１の西側で検出した柱穴列である。南北 3 間（約 3.45m）で，調査区外にのびる掘立柱建物と考えられる。柱間は南から約 1.25m，1.15m，1.05mである。柱穴埋土は黒褐色のシルト質極細砂である。ＳＢ－１同様，遺物は出土していない。埋土の土色や建物の方位からＳＢ－１と同時期と考えられる。



第 17 図 SB－1平･断面図

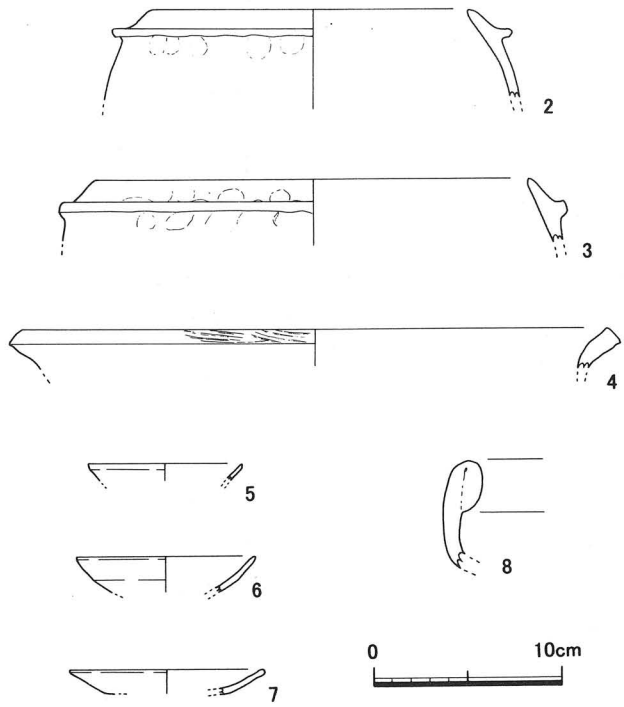


第 18 図 SB－2平･断面図

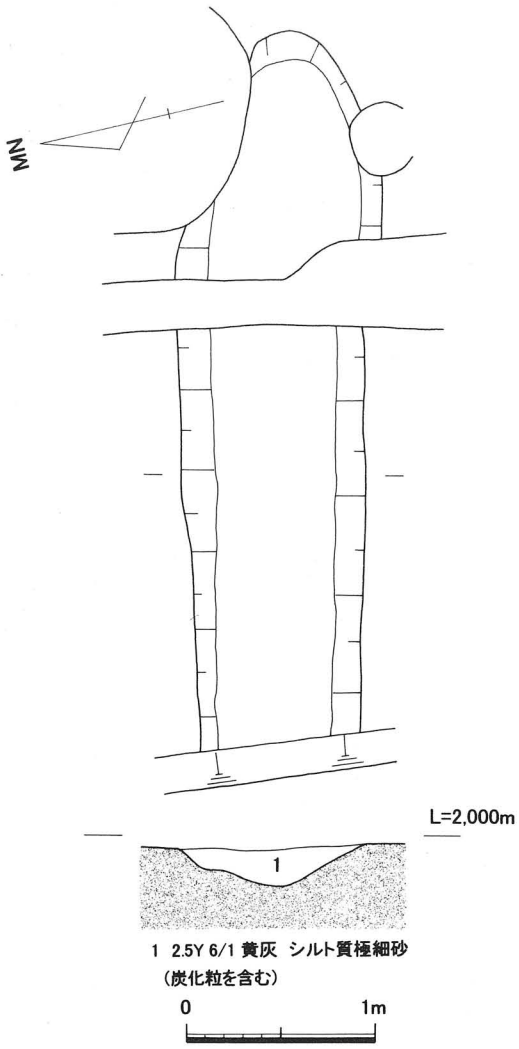
(3) 中世後半～近世の遺構・遺物

ＳＤ－１

調査区南部で検出した幅約 1m，検出長約 3.8m，深さ約 20 ㎝を測る溝である。埋土は単層で炭化物を含む黄灰色シルト質極細砂である。出土遺物は 15 世紀～16 世紀のもので，土師質土器羽釜（2･3），土師質土器鍋（4），土師小皿（5～7），備前焼甕（8）がある。石製紡錘車（1）も混入品として見られた。



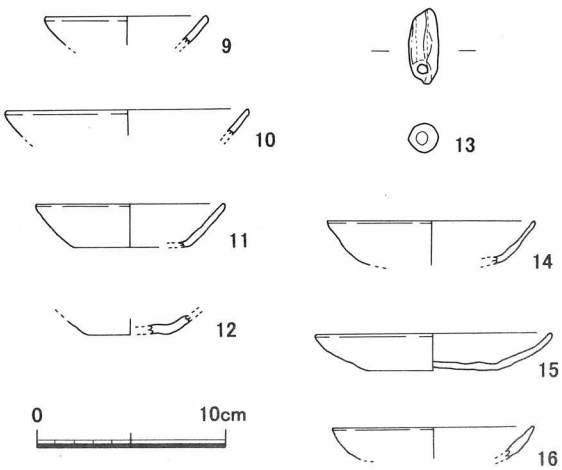
第 20 図　SD－1出土遺物実測図



第 19 図　SD－1平･断面図

ＳＤ－２～６（近世小溝）

調査区の中央を南北に流れるＳＤ－２は幅約 20 ㎝，深さ約 5～10 ㎝を測る。埋土は黄灰色シルト質極細砂の単層で，断面形態は半円形を呈する。ＳＤ－３～６はこのＳＤ－２と平行し，溝幅，深さ，埋土もほぼ同じことから同時期の溝群と考えられる。出土遺物は土師小皿（9～12＝ＳＤ－２，14・15＝ＳＤ－３，16＝ＳＤ－４）がほとんどであるが，ＳＤ－２出土遺物の中に土錘（13）が１点見られた。図示できた遺物は中世後半のものであるが，ＳＤ－２出土遺物中に肥前系の染付磁器碗が見られることから、18 世紀頃の溝と考えられる。

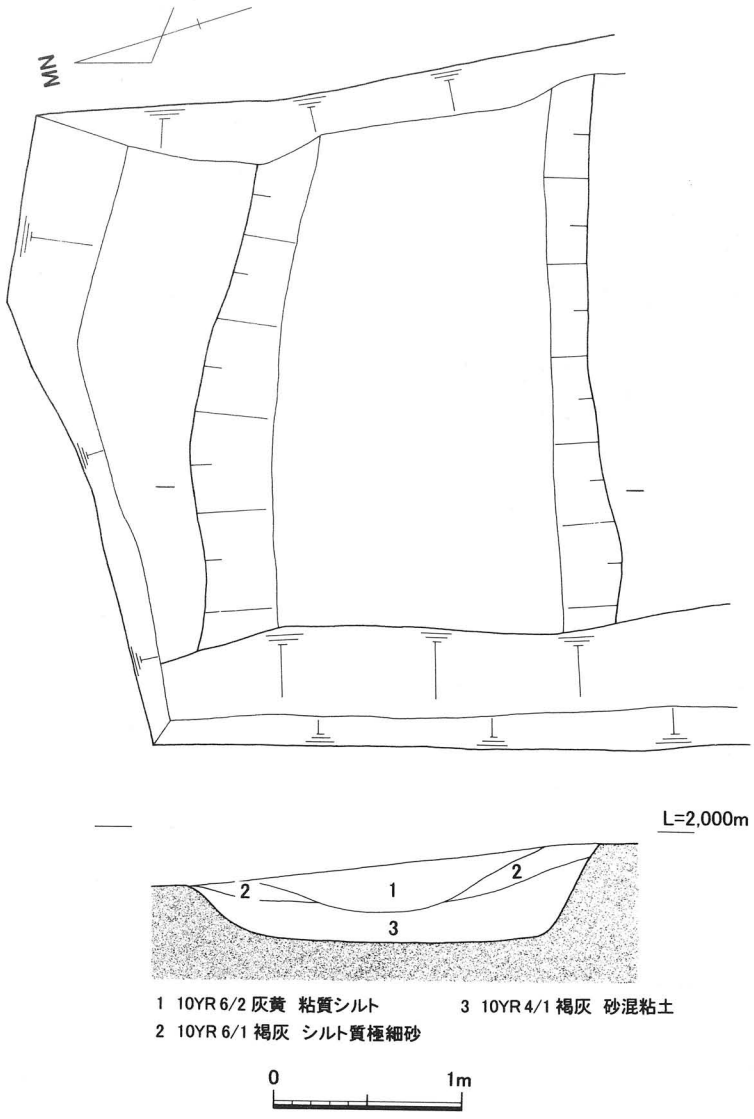


第 21 図　SD－2～4 出土遺物実測図
（9～13=SD-2,14･15=SD-3,16=SD-4）

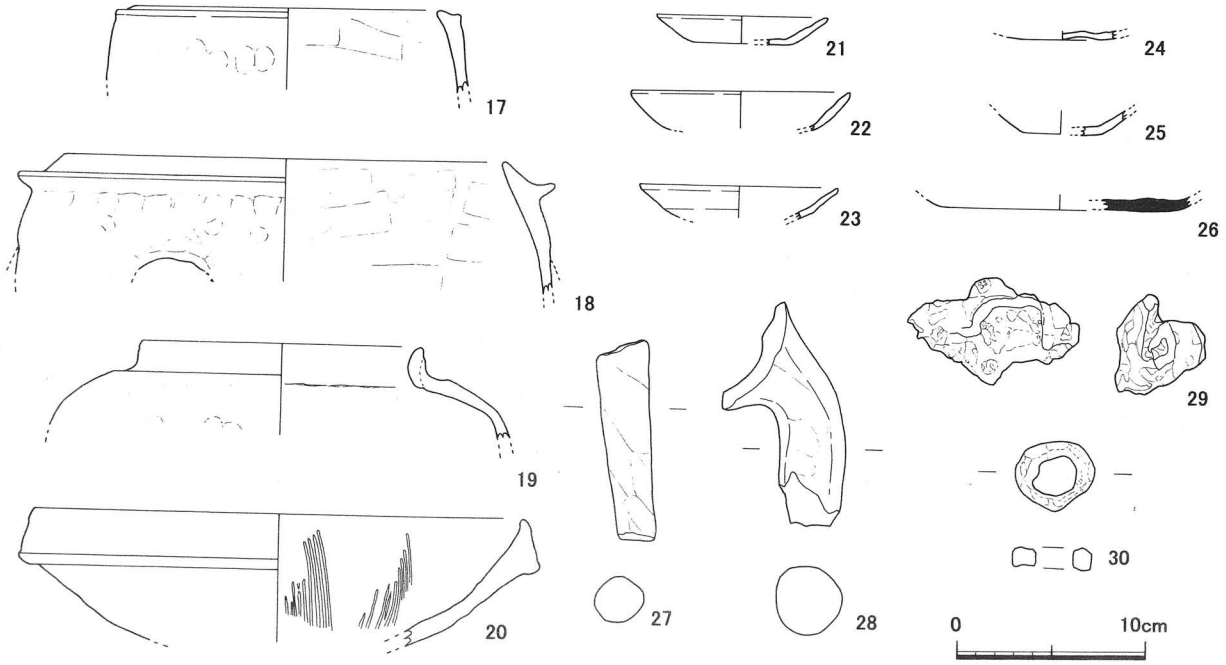
ＳＤ－７

調査区の北端で検出した幅約 2.2m，深さ約 50 ㎝の東西方向の溝である。埋土は 3 層に分層でき，断面形状は逆台形を呈する。北側の掘りこみが緩やかなのに対し，南側の掘りこみは急である。地山が北側に向かって下がっているため，北側が浅く見受けられる。

遺物の多くは埋土の上層部分から出土した。土器類では土師質土器羽釜（17･18），土師質土器茶釜（19），備前焼擂鉢（20），土師小皿（21～25），土師質土器土鍋脚部（27･28），が見られた。概ね 15～16 世紀にかけてのものと考えられる。須恵器杯（26）は混入品である。また金属製品も見られ，鉄鉾（29）と輪状を呈する不明金属製品（30）の 2 点がある。



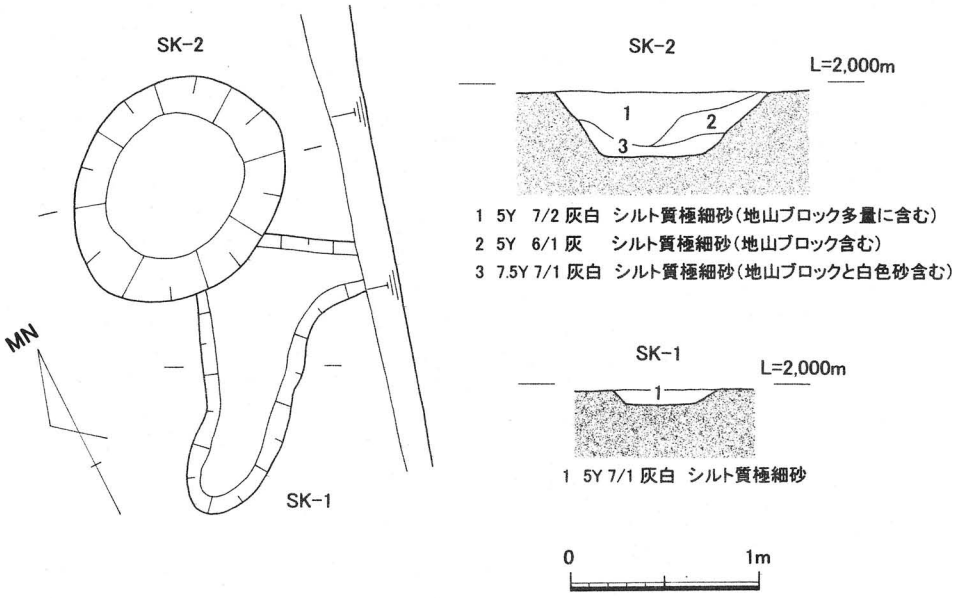
第 22 図 SD－7平･断面図



第 23 図 SD－7出土遺物実測図

ＳＫ－１

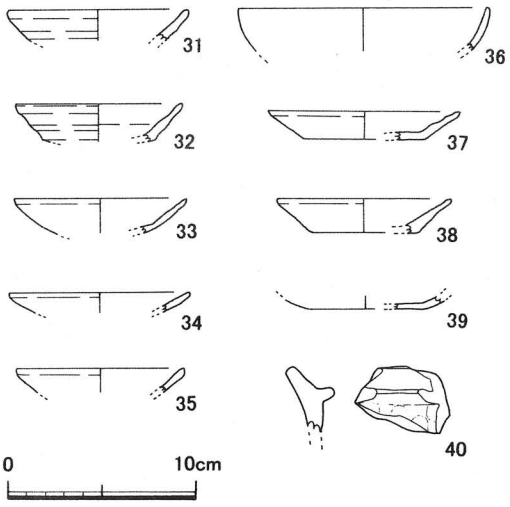
調査区の南東端で検出したＬ字状の土坑である。長辺約 1.55ｍ，短辺約 60 ㎝を測る。埋土は灰白色シルト質極細砂の単層で，断面形態は逆台形を呈する。深さは約 10cm と浅いものの，土師小皿 9 点（31～39），土師質土器羽釜 1 点（40）が出土している。



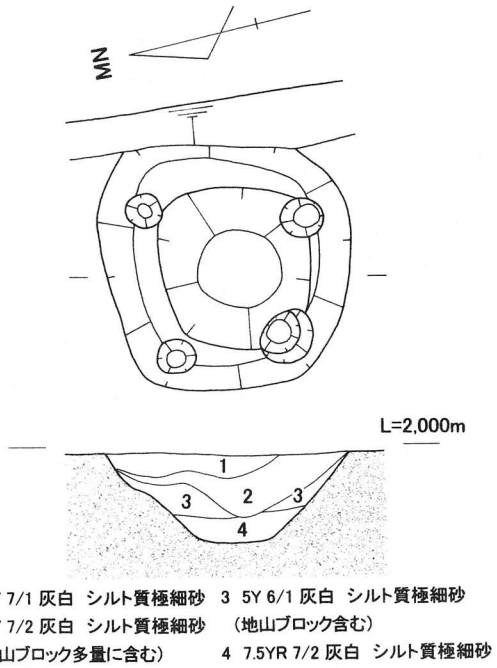
第 24 図 ＳＫ－１，ＳＫ－２平・断面図

ＳＫ－２

ＳＫ－１を切った状態で検出した楕円形の土坑である。長径約 1.3m，短径約 1.1m，深さ約 40cm を測る。埋土は 3 層に分層でき，断面形状は逆台形を呈する。遺物は出土しておらず時期は不明であるが，埋土から判断して近世のものと考えられる。



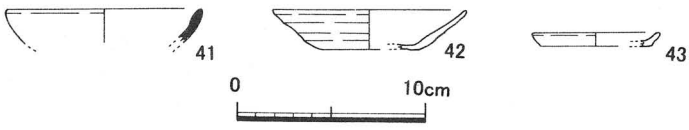
第 25 図ＳＫ－１出土遺物実測図



第 26 図 ＳＫ－３平・断面図

ＳＫ－３

ＳＫ－２の北方で検出した隅丸方形の土坑である。長辺約 1.4m，短辺約 1.3m，深さ約 50cm を測る。遺構の中層部分で段を設け，下層部分のみ 1 回り小さく掘削されている。中層の段部分の 4 隅には径 20～35cm，深さ

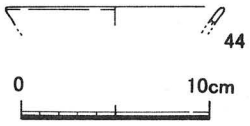


第 27 図 ＳＫ－３出土遺物実測図

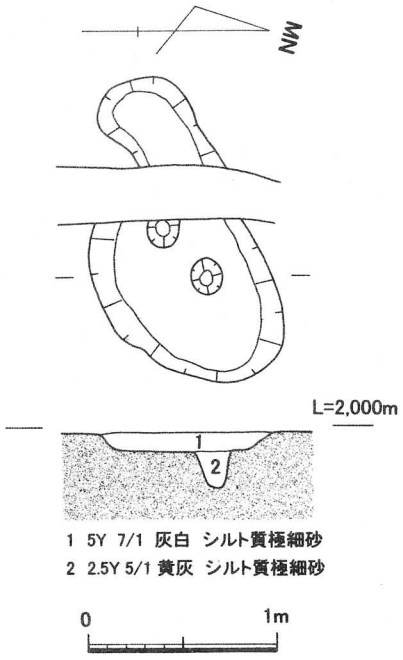
20～30cm の柱穴が見られることから，覆屋の存在が指摘できる。遺物は須恵器小皿 1 点（41）と土師小皿 2 点（42･43）があるが，肥前系磁器も出土していることから，江戸時代の遺構と考えられる。

ＳＫ－４

ＳＤ－２に切られた状態で検出した不整形な土坑である。長辺約 1.7m，短辺約 90cm,深さ約 10cm を測る。埋土は単層で,断面形態は逆台形である。遺構の底面から径約 15cm のピット 2 基を検出した。出土遺物は土師小皿（44）のみである。



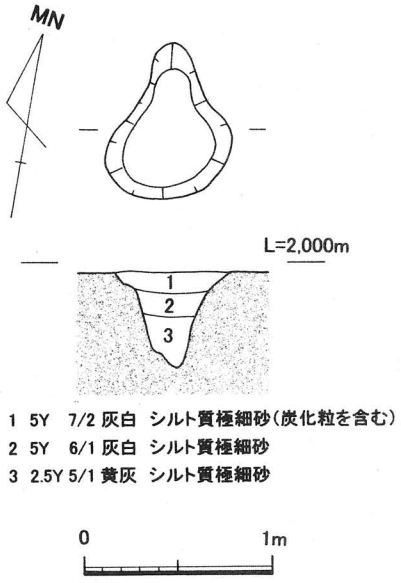
第 29 図　SK－4出土遺物実測図



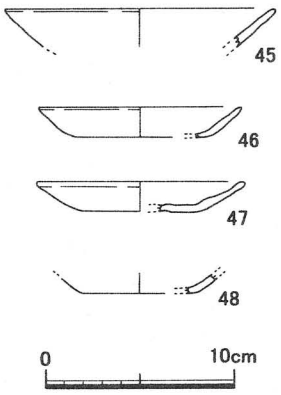
第 28 図　SK－4平･断面図

ＳＫ－５

ＳＫ－４の南側で検出した不整形な三角形を呈する土坑である。長辺約 85cm,短辺約 70cm,深さ約 55cm を測る。埋土は 3 層に分層でき，断面形態はＶ字を呈する。遺物はすべて上層から出土しており，土師小皿 4 点（45～48）のみである。



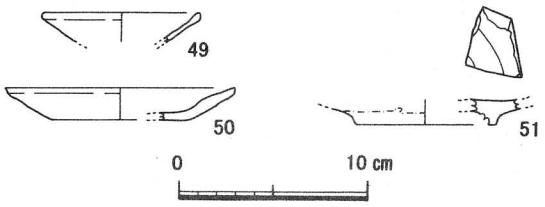
第 30 図　SK－5平･断面図



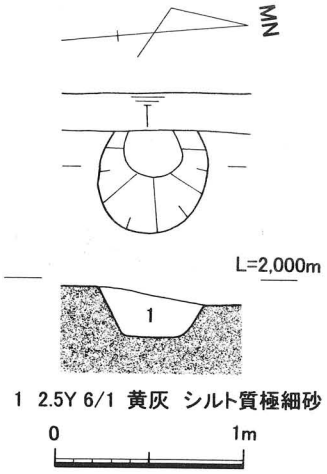
第 31 図　SK－5出土遺物実測図

ＳＫ－６

調査区の南西部で検出した土坑である。遺構の西側が調査区外へのびるため不明であるが，平面形態は楕円形を呈すると考えられる。現存部での径は約 60cm，深さ約 30cm を測る。埋土は黄灰色シルト質極細砂の単層で，断面形態は逆台形を呈する。出土遺物は土師小皿 2 点（49･50）が見られるものの，高台無釉で見込み蛇の目釉ハギを施す肥前系陶器皿（51）が見られることから 17 世紀の遺構と考えられる。



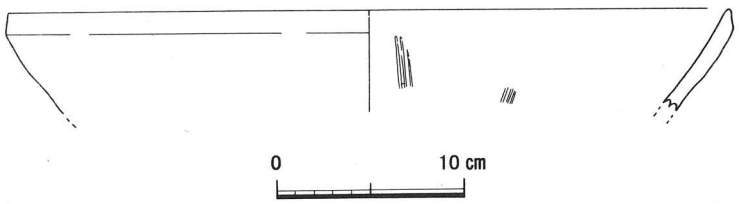
第 32 図　SK－6出土遺物実測図



第 33 図 SK－6平･断面図

ＳＫ－７

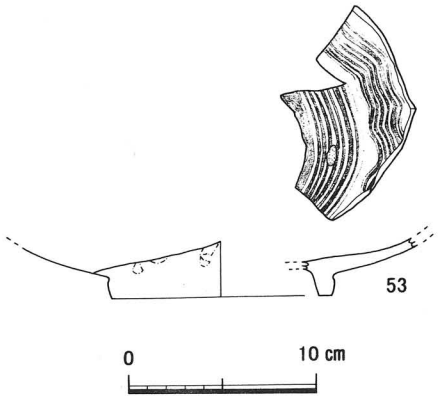
調査区の中央放胆でＳＫ－８に切られた状態で検出した土坑である。東半が調査区外にのびるが，円形を呈すると思われ，現存部での径は約 1m，深さ約 10cm を測る。埋土は単層である。出土遺物は擂目３条の土師質土器擂鉢（52）のみである。



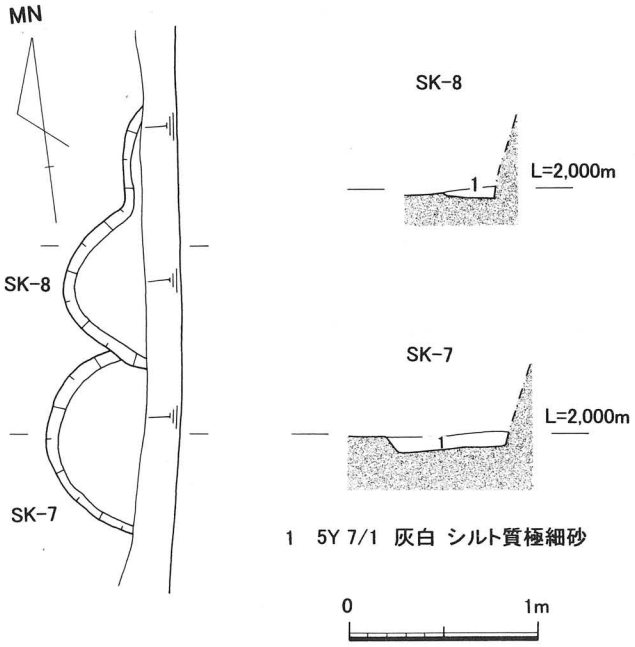
第 34 図 SK－7出土遺物実測図

ＳＫ－８･９･10･11･12

いずれも埋土は灰白色シルト質極細砂の単層で，近世の遺構と考えられる。遺構の残りも悪い。ＳＫ－９から高台無釉で，砂目痕が見られる肥前系陶器の鉢（53）が見られた。



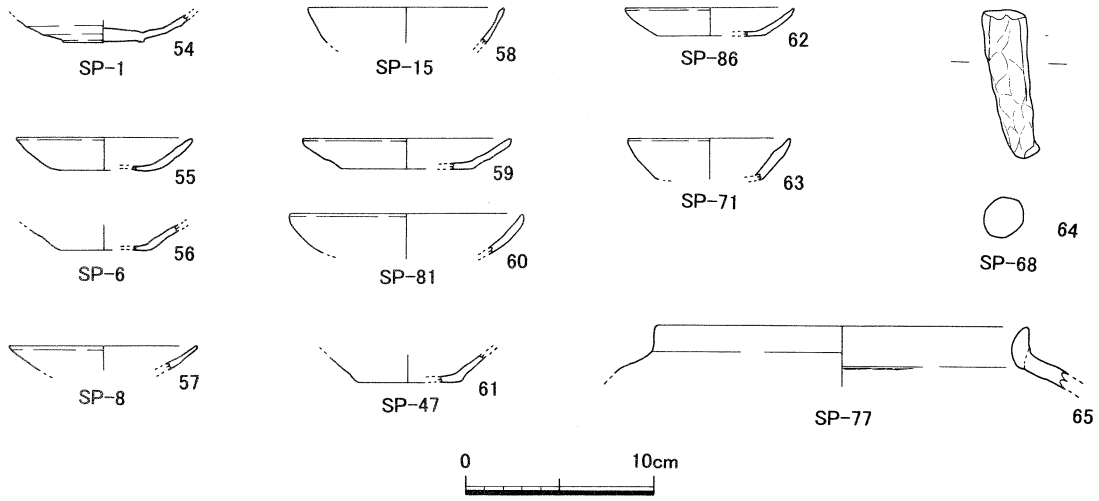
第 36 図 SK－9出土遺物実測図



第 35 図 SK－7，SK－8平･断面図

ＳＰ出土遺物

調査区内で 89 基のピットを検出しており，濃密な分布を示しているといえる。中世以前の掘立柱建物（ＳＢ－１・ＳＢ－２）を構成する柱穴以外の大半のものは中世後半のものと考えられる。ＳＰ－３およびＳＰ－56 では根石と考えられる平らな石を検出しており，建物の存在を示唆するものである。調査地が細長く狭いため，建物の復元には至らなかった。出土遺物は土師小皿（54～63）が中心であるが，ＳＰ－68 では土師質土器土鍋の脚部（64），ＳＰ－77 では土師質土器茶釜（65）が出土した。いずれも中世後半のものである。



第 37 図　SP出土遺物実測図

7．まとめ

神内城は古くから山田郡一帯に勢力をもった植田氏の一族である神内氏の城である。神内氏は，文治元年（1185）年の源平屋島の合戦ですでに活躍していたと言われる。本拠地の植田郷にも神内城という同名の城を構えており，天文～天正（1532～92）頃に神内景之・清定が植田郷で 300 石，木太郷で 700 石領有しており，新たに木太郷に城を築いたとされる。

この木太郷の神内城は『讃岐国名勝図絵』において今回の調査地付近に描かれている。その位置については，ほぼ条里地割に合う形で直角に流路を改変させている宮川流路の北西側の「城屋敷」と呼ばれる微高地が推定されている。また，城域については，宮川を神内城の南限・東限とし，150m四方の範囲が推定されている。（注１）

今回の調査地はこの推定城域の中央部に位置する。城郭関連の遺構としては中世後半の柱穴群を検出はしているものの，建物の復元には至っていない。また，調査地の北端で検出したＳＤ－７は推定城域の南限である宮川流路から１町余り（約 120m）北側で検出した溝である。調査地の北方の状況が不明確であるが，地山が北へ向かって下がっており，かつＳＤ－７の南側で柱穴群を検出していることから，この溝が城域の北限の堀であった可能性は高い。一方，遺物面では鉄鉾が見られ，一般集落とは異なる様相を見せる。また，土師小皿の出土量が多いことも特徴的である。調査で検出した遺構・遺物は一部古墳時代や近世のものも見られるが，概ね 16 世紀と考えられ，神内城の築城年代と合っている。

次に，城郭の規模であるが，東西に約 150m流れる宮川の流路とその西・北側に以前は低地が巡って堀跡らしい様子がうかがえたことから 150m四方が推定されたものである。（注 1）しかしながら，今回の調査で検出した城域の北限と考えられるＳＤ－７はこの宮川の東西流路から約 120m北側で検出した溝で，これまでの推定と調査結果が矛盾する結果となった。

では，旧地形での堀跡らしき低地について検討してみる。1962 年撮影の航空写真（注２）では調査地周辺は市街地化されておらず，旧地形がよくわかる。地元の人が言うように神内城跡の西・北側を巡るように低地の痕跡が認められる。しかしながら，この地形は旧河道によるものと考えられる。周辺地形を観察すると旧河道は南西方向から北流し，現在の校舎部分を島状に残して北東方向に流れて

いた痕跡が見られ，堀跡らしき低地はその一部であると考えられる。この堀跡らしき低地も城郭の防御ラインの一端を担ったことが想像されるが，堀跡とは考えにくい。

一方，同じ航空写真において，この旧河道の南側で宮川の流路に接して約 120m四方の地割が見られる。地割の北限は今回検出したＳＤ－７とほぼ一致する。ＳＤ－７の時期が神内城の存続時期とほぼ一致することを考えると，この 120m四方の地割が神内城であった可能性がある。

《参考文献》

注1　秋山　忠　1982　『古城跡を訪ねて』　高松市歴史民俗協会・高松市文化財保護協会

注2　香川県教育委員会 1998　『木太本村Ⅱ遺跡』

写真４　神内城跡調査区全景（北から）

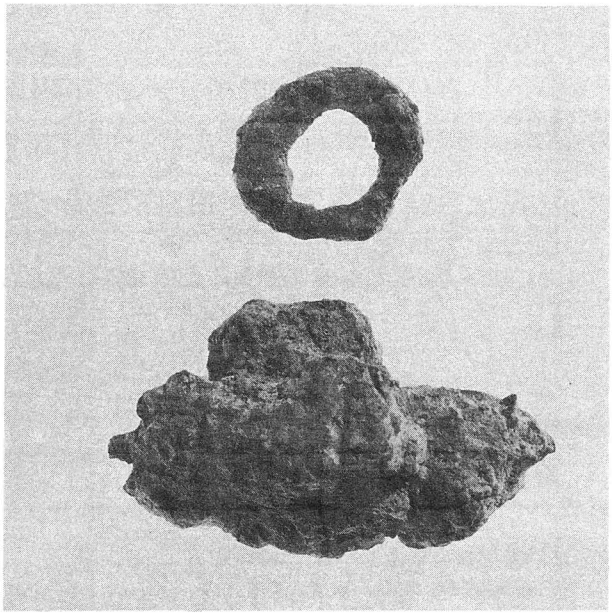


写真７　SD－７出土金属類

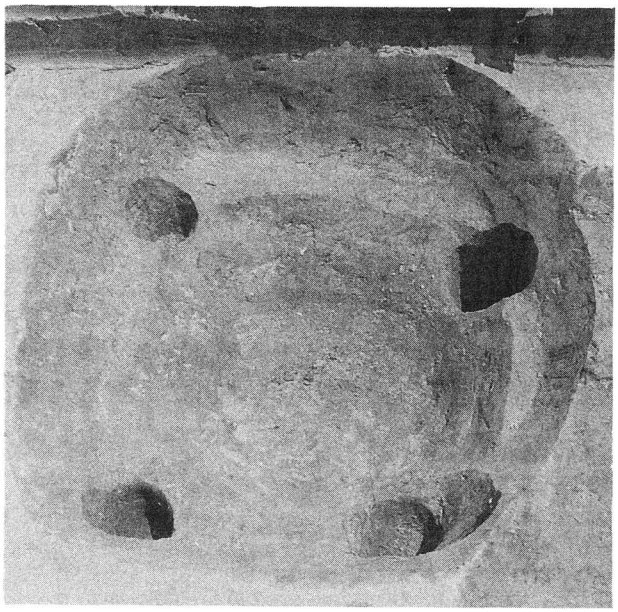


写真５　SK－３完掘状況（西から）

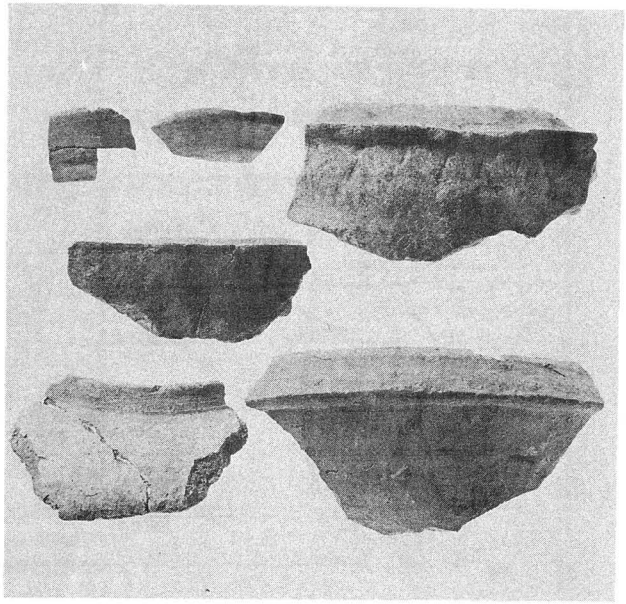


写真８　SD－７出土土器類

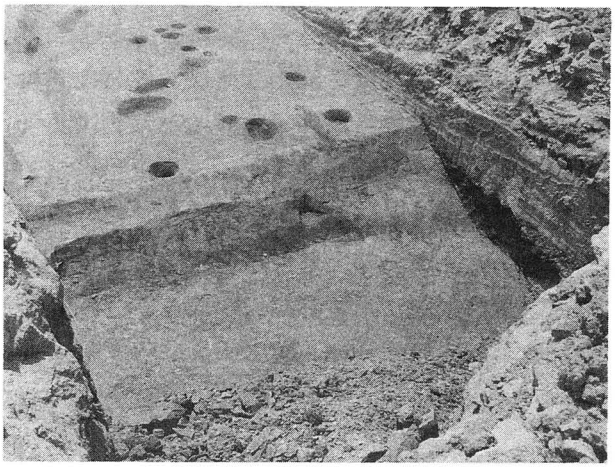


写真６　SD－７完掘状況（北から）

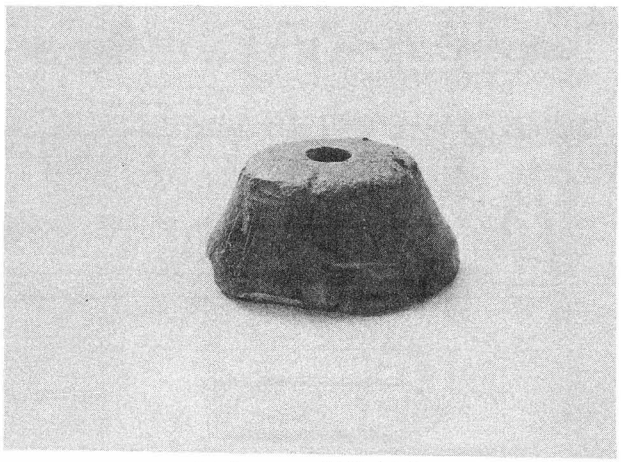
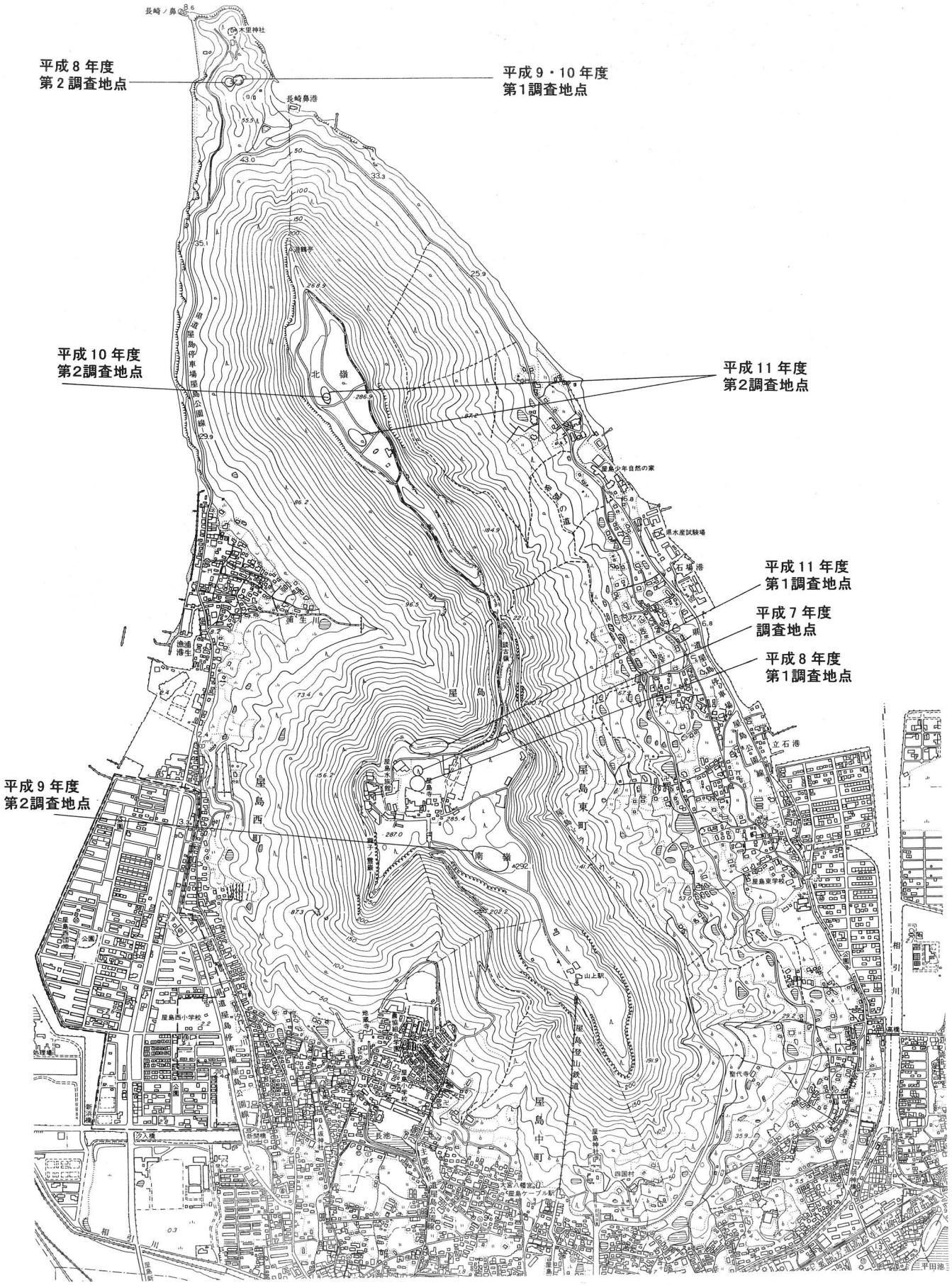


写真９　石製紡錘車



第38図　史跡天然記念物屋島基礎調査事業調査地位置図

平成11年度発掘調査　第１調査地点(北嶺)

１．所在地　　高松市屋島西町北嶺山上部（国立公園内）

２．調査期間　平成１２年２月８日～平成１２年３月３０日

３．調査面積　約３４２㎡

４．発掘調査の概要

(1) 第１トレンチ

第39図　第1調査地点トレンチ配置図

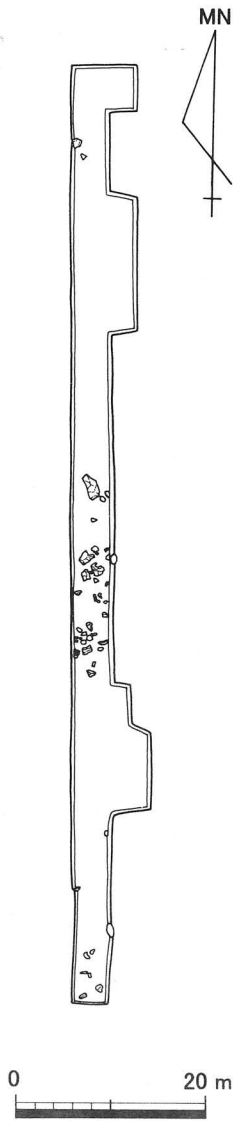
辺からは１２世紀後半～１３世紀初頭にかけての土器が出土したことからこの時期の産物である可能性が考えられる（平成１１年度概報参照)。

平成１１年度の調査では石列の延長およびその性格を確認すること，それ以外に埋没している遺構を確認するためトレンチ調査を行った。トレンチ調査の結果，平成１０年度の調査で確認した石列以外には遺構は認められなかった。

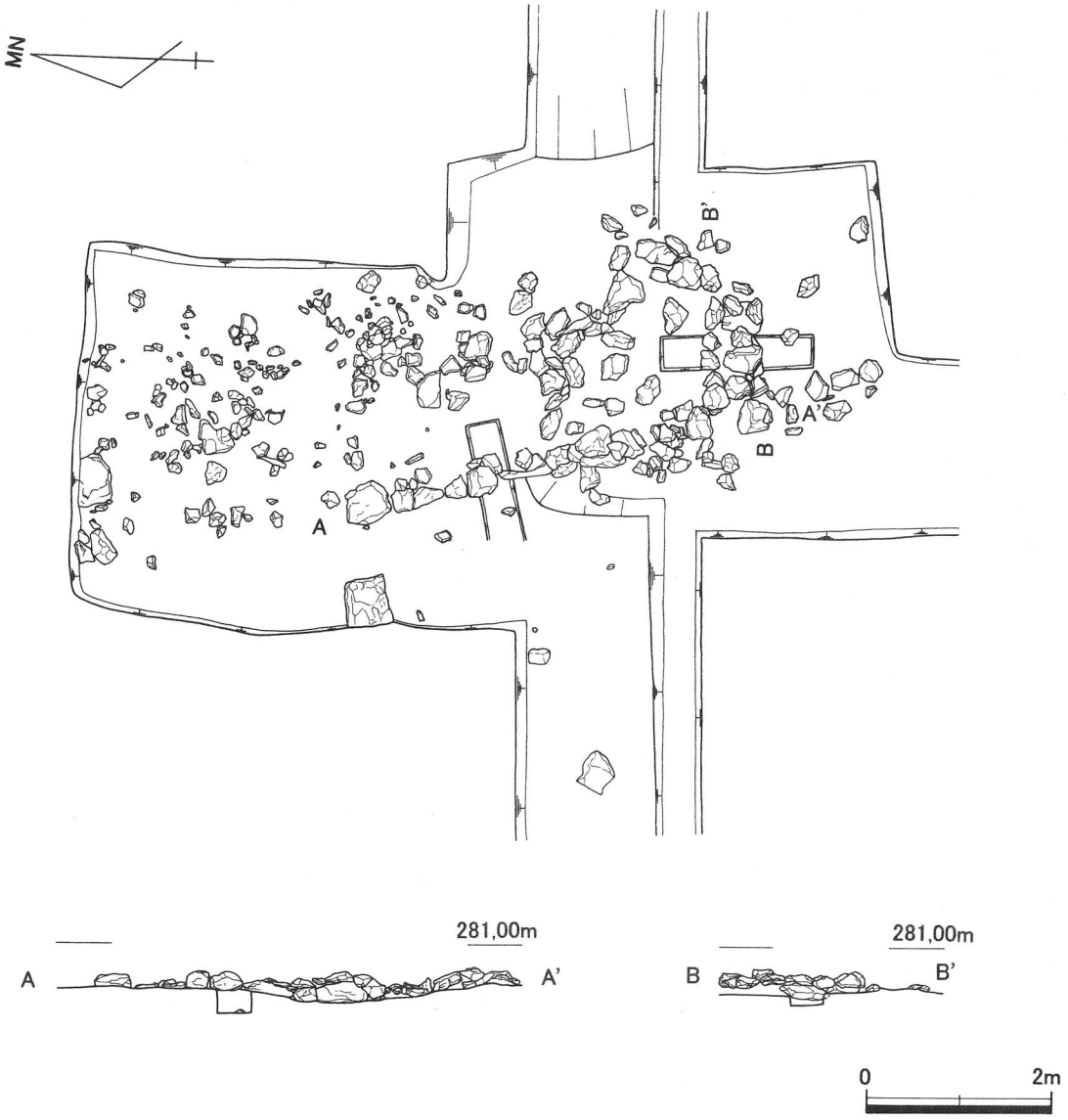
検出遺構

平成１１年度のトレンチ調査により石列の全容が判明した。一部石積みが崩落している個所もあるが，石列の規模は西側で南北４.８０m，東西1.６０m のL字状に並べられている。平成１０年度の確認調査では，東側にも直線的に石が並んでいるようにみられたことから基壇状の遺構を想定したが，調査の結果，東側については列を成していないことが判明した。

平成 11 年度の調査地は第４０図に示したとおり平成 10 年度第２調査地点に直行する南北 50 m，幅２mのトレンチを設定した。これは平成１０年度の確認調査で南北方向にのびる安山岩を使用した石列を確認したが，調査範囲が狭かったこともあり，石列の北端は確認したものの南端は確認できなかった。石列中およびその周



第40図　第1トレンチ遺構図

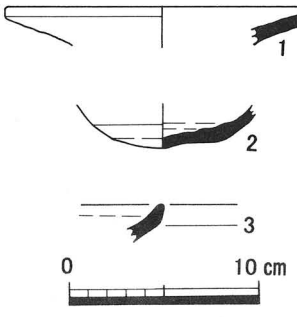


第41図　第1トレンチ内石列平・断面図

石列は西面から見ると石列の天端が標高２８０．７０m前後に揃っている。西側石列の中央部付近の地形が下がった部分では２段に積んだ部分も認められ，上段の石は石列のレベルを合わせるため薄い素材を使用している。石列の用途については，調査当初トレンチ東側にある湿地を塞ぐ堰状のものを想定したが，堰状の遺構であれば標高の低い部分に作られるが，湿地の周辺で標高が低い部分はトレンチ南側の東西方向に走る遊歩道付近が低く，石列の位置からは離れることからその可能性は少ないものと考えられる。現在のところ，なぜこの部分に石列が作られたかは不明である。

出土遺物

石列付近については，昨年度にトレンチ調査を行ったため図化できる遺物はないが，第１トレンチからの出土遺物は第４３図に示した。トレンチ内での出土位置は調査用基準杭から北に２４mで弥生時代後期と考えられる広口壷の破片が数点出土している。調査用基準杭から北へ２６．５mでは須恵



第 42 図 第1トレンチ出土遺物実測図

器壷もしくは瓶の底部が出土。トレンチ北端では８～１０世紀の遺物片などが出土しているが，総じて遺物の量は少ない

(2) 第２トレンチ

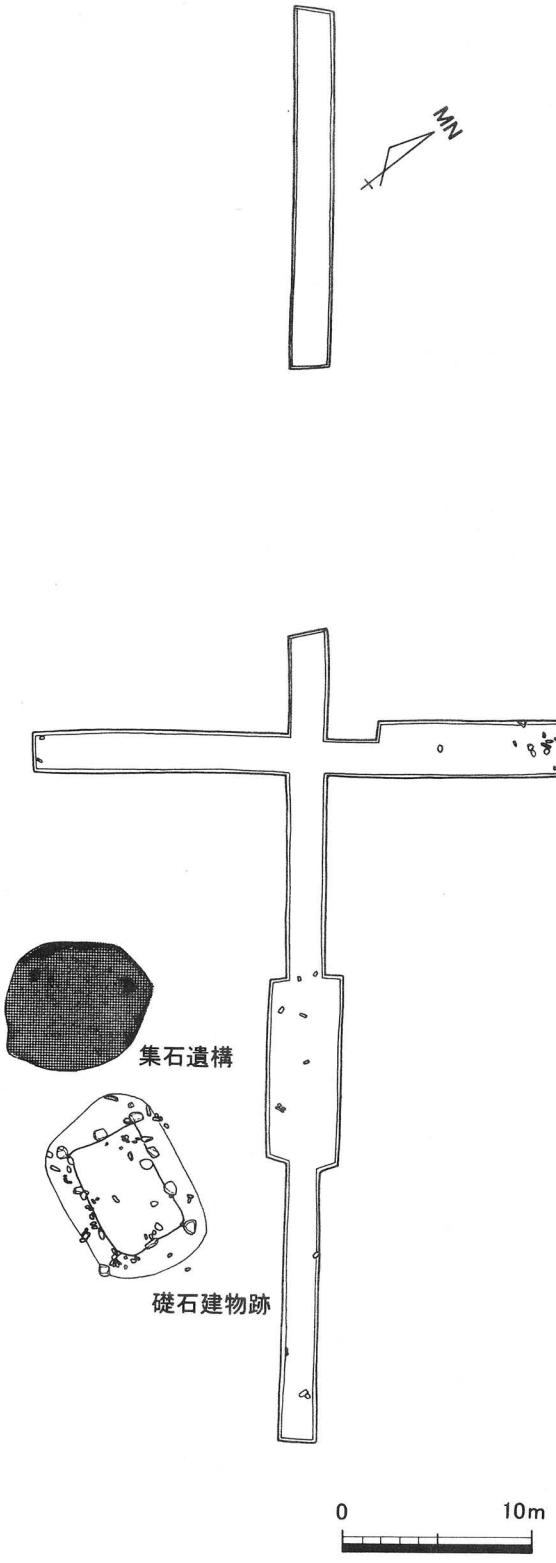
第１トレンチから南へ１２０m，芝生広場から北へ１５mの位置において南北７６m（一部断絶），西２９mの変形十字トレンチを設定した（第４４図）。調査の進展に伴い遺物が多く確認された箇所は随時トレンチを拡張した。トレンチからは明確な遺構は確認できなかったものの，北側トレンチを除くトレンチ全域から遺物の出土が見られた。

出土遺物

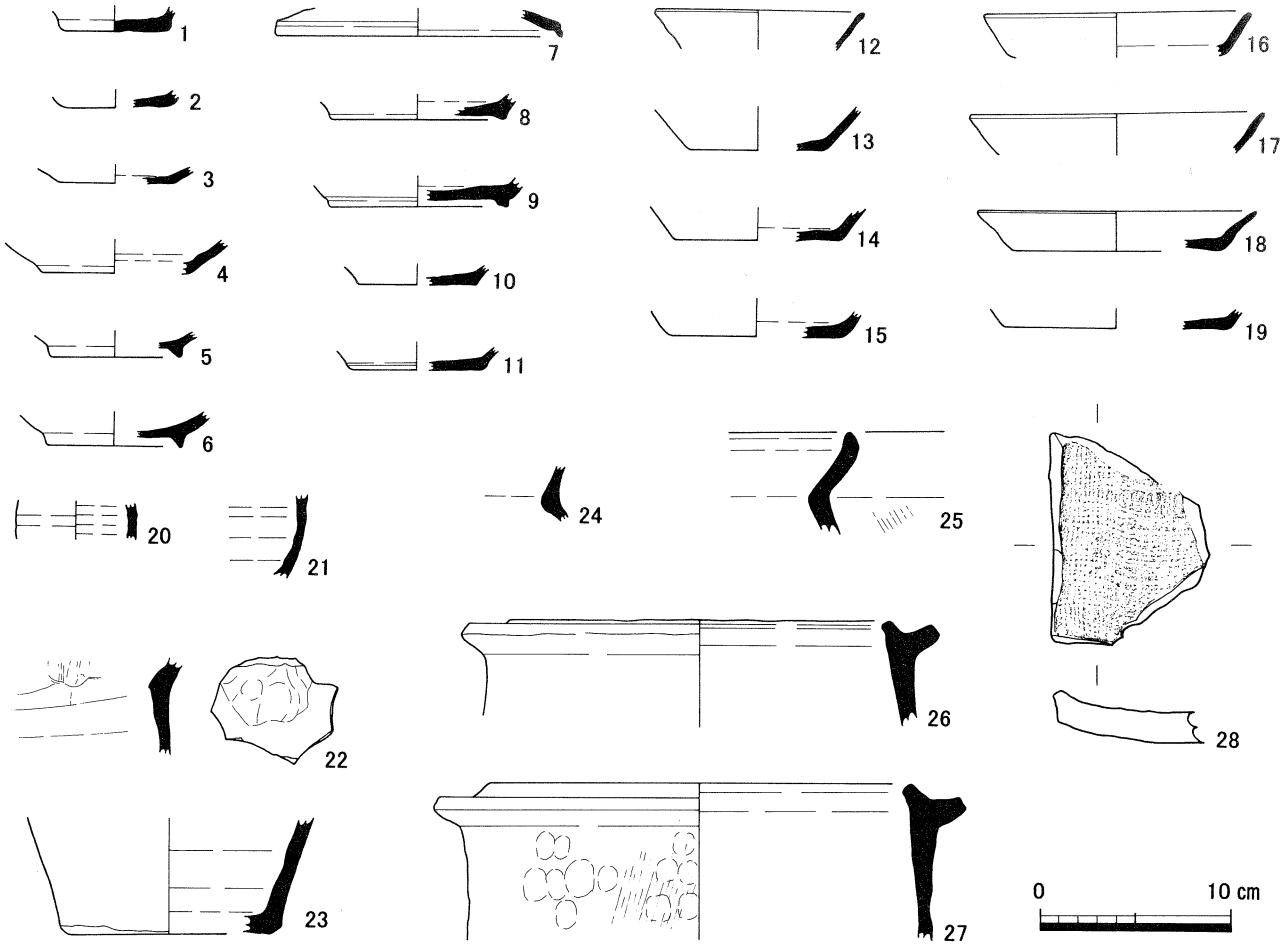
第４５図１～４は土師器の杯である。５，６は黒色土器の椀である。７は須恵器の杯蓋である。８，９は高台をもつ須恵器の杯である。１０～１５は須恵器の杯である。１６～１９は須恵器の皿である。２０，２１は須恵器の体部片であるが形態等から小壺と考えられるものである。２２は須恵器多嘴壷肩部である。２３は須恵器壷の底部である。２４，２５は土師器の甕片である。２６，２７は土師器の土釜である。２８は平瓦片で焼成は須恵質で良好である。第２トレンチから出土した遺物は一部８世紀のものも含まれるが，主体を占めるのは９世紀後半～１０世紀前半のものと考えられる。この内２０，２１の小壺や２２の多嘴壺は一般の集落からはあまり出土しないものである。トレンチ南側で確認した礎石建物や集石遺構と密接に関係する遺物であると考えられる。

(3) 分布調査

トレンチ調査に並行して周辺の分布調査を実施したところ，第２トレンチの西側で基壇をもつ２間×３間の礎石建物跡を確認した。確認した基壇の範囲は南北９m，東西６．５m，高さ０．３mである。礎石の規模は６０cm×６０cmの上部が平坦な安山岩を使用している。西側礎石列の南から１，２番目の礎石が原位置を保っていない他はつくられた当時の位置を保っているものと考えられる。礎石建物跡の北側では南北７m，東西８mの範囲において安山岩の集積を確認した。北側の集石の中央部には，安山岩の板石を立て石槨状にした部分も認められた。



第43図　第２トレンチ遺構図

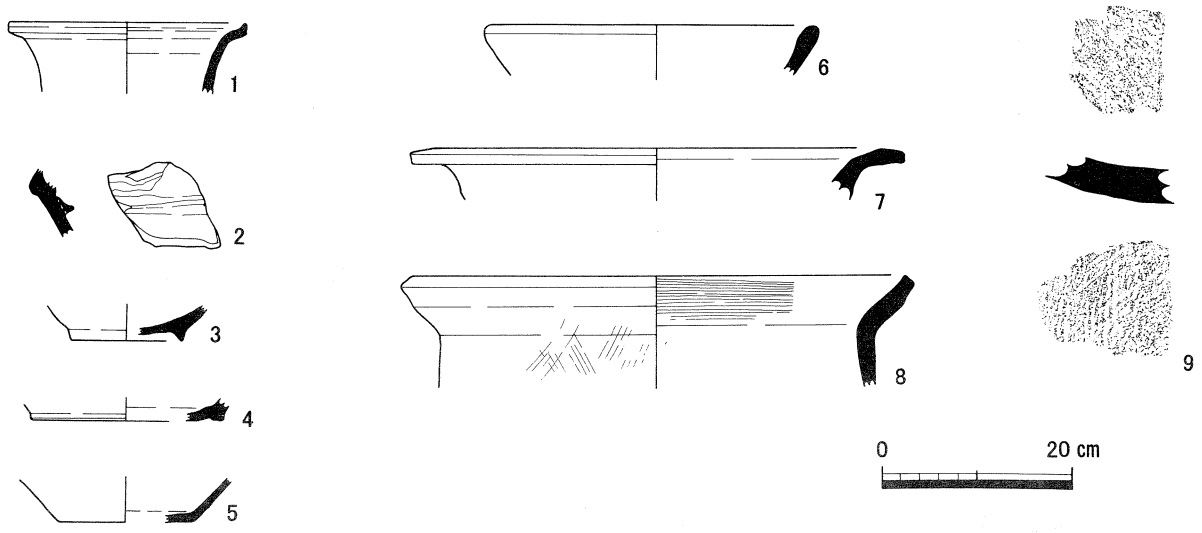


第44図　第２トレンチ出土遺物実測図

礎石建物跡および集石遺構周辺から須恵器多嘴壷片等を表採した。この他，礎石建物跡から北へ１００ｍの位置で長方形の石積基壇を確認した。これらの遺構は分布調査で確認したのみで，その性格は不明であることから平成１２年度に確認調査を実施している（詳細は平成１３年度の概報で報告予定）。

表採遺物

第４６図は礎石建物および集石遺構の広がりを確認するため，落ち葉を除去した段階で確認した遺物



第45図　表採遺物実測図

である。１，２は須恵器の多嘴壺の口縁部および肩部片である。３は黒色土器の椀，４は須恵器の高台をもつ杯である。５は須恵器杯である。６は土師器の鉢もしくは杯であると考えられる。７は須恵器の広口壺である。８は土師器の甕である。９は軟質の平瓦である。表採遺物についても第２トレンチから出土しているものとほぼ同じ時期のものが認められ，遺物の傾向もよく似ている。

平成１１年度発掘調査　第２調査地点（南嶺）

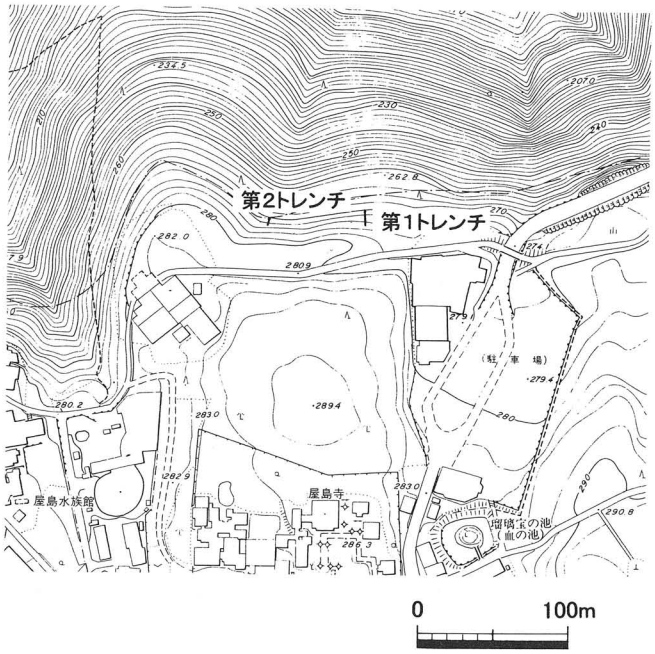
１．所在地　　高松市屋島東町１８２１－１

２．調査期間　平成１２年３月５日～平成１２年３月３０日

３．調査面積　１８㎡

４．発掘調査の概要

南嶺の北斜面には標高２７３m前後の斜面から急斜面に変化する位置に，幅２m程の平坦地とその前面斜面の一部には石積みが認められる他，平坦地の下段にも幅２mの平坦地がみられる箇所もあるなど，人工的に作られたと考えられる箇所が延長約２００mの距離で続いている。この人工的な構造物は展望台前面の斜面を西に回り込んだところで一旦途切れるが，水族館北側の谷寄りで一部同様な地形が確認できることが現在のところ判明している。水族館北側の谷を越えた部分では後世の土盛りで確認することはできない。東側についてもドライブウェー駐車場西側の展望台造成時に埋没したものか展望台裾で消滅する。表面の観察からは古代山城の外郭線土塁に特有な山側に寄せかけて土を盛り，その上部を平坦に築く「夾築」法に似る。壁面を石垣とする石塁にも他の古代山城に類例があるが，すべての場所が石塁になるのではなく目立つ部分の一部に造るという状況も同じである。

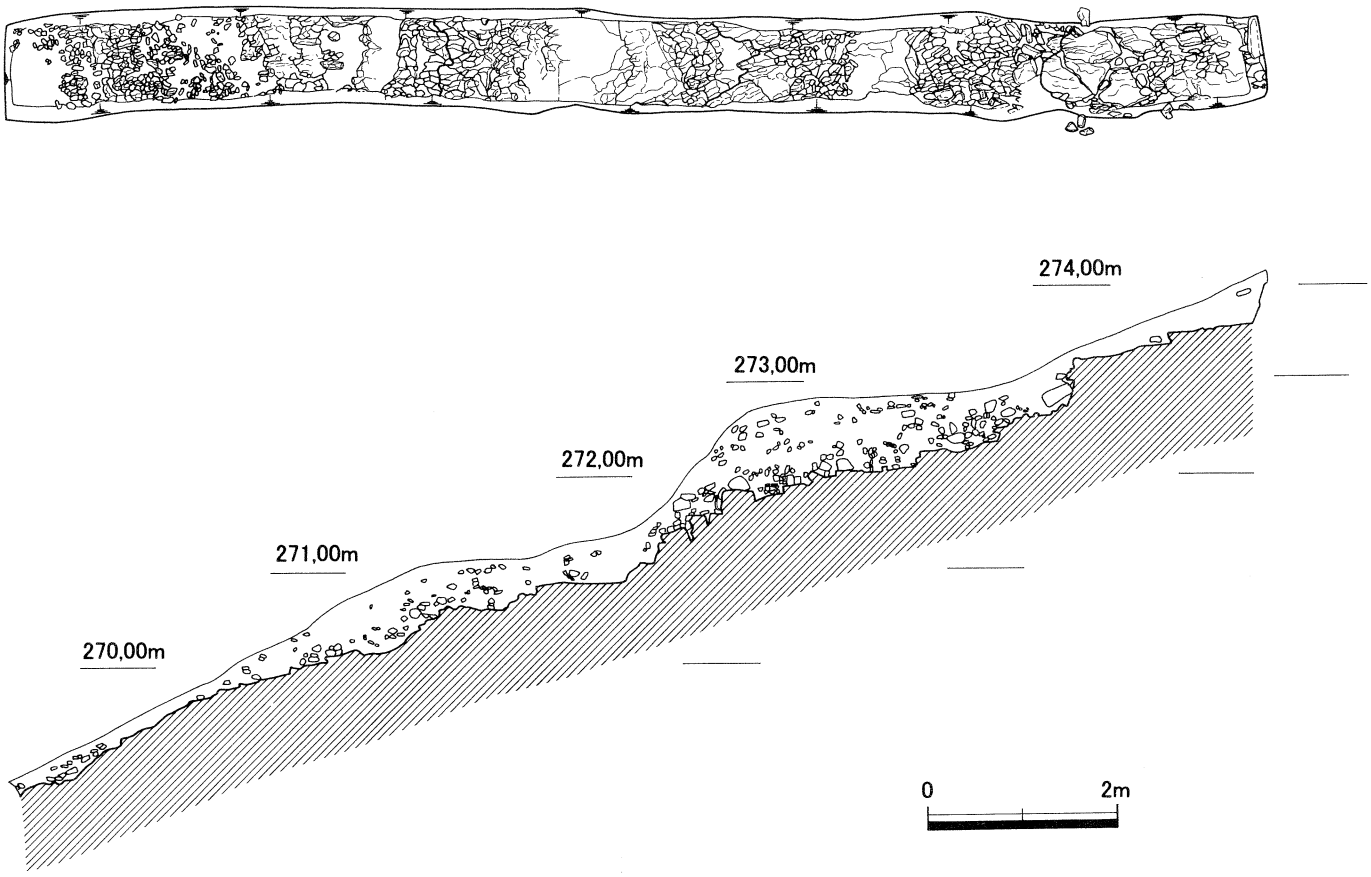


第46図　第２調査地点トレンチ配置図

外観からの状況は他の古代山城と非常に似ているが，古代山城の土塁の構築には砂と粘土を交互に積み上げる版築技法が一般的であることから，トレンチ調査によりこの工法が認められるかどうかが古代山城に伴う遺構を決定する一つの目安となる。平成１１年度は南嶺北側斜面の２個所にトレンチを設定し（第４７図），土塁の内部構造の把握に努めた。

(1) 第１トレンチ

トレンチの設定場所は南嶺北斜面の中央展望台東側で，幅２mの平坦地が上下２段に存在する場所である。外郭線と考えられる平坦地および斜面に直行する形で，南北１３m，幅１mのトレンチを設定して調査を行った。上段の平坦地では深さ１mで安山岩の岩盤に到達する。下段の平坦地は深さ０．５０mで安山岩の岩盤に到達する。トレンチ内の岩盤の状況は南端で岩盤が露出し，上段平坦面下部では１２°の緩やかな傾斜が認められ，下段平坦面下部においても同様に１２°の角度で傾斜している。それより北側については２７°３０′の角度になり傾斜はきつくなる。一方，外面の地形を断面で観察してみると上段平坦面の北端部が流出しており，流出したと考えられる土塁構築土が下部平坦地に堆積している。



第47図　第1トレンチ平・断面図

このことから上段平坦地前面の斜面傾斜角度について現況では４９°であるが，築造当初は７２°の傾斜で作られていたものと考えられる。トレンチ内の土層は安山岩小礫と安山岩風化土である赤褐色土で充填されている。これらの埋土には版築を行ったような形跡は観察できなかった。

出土遺物

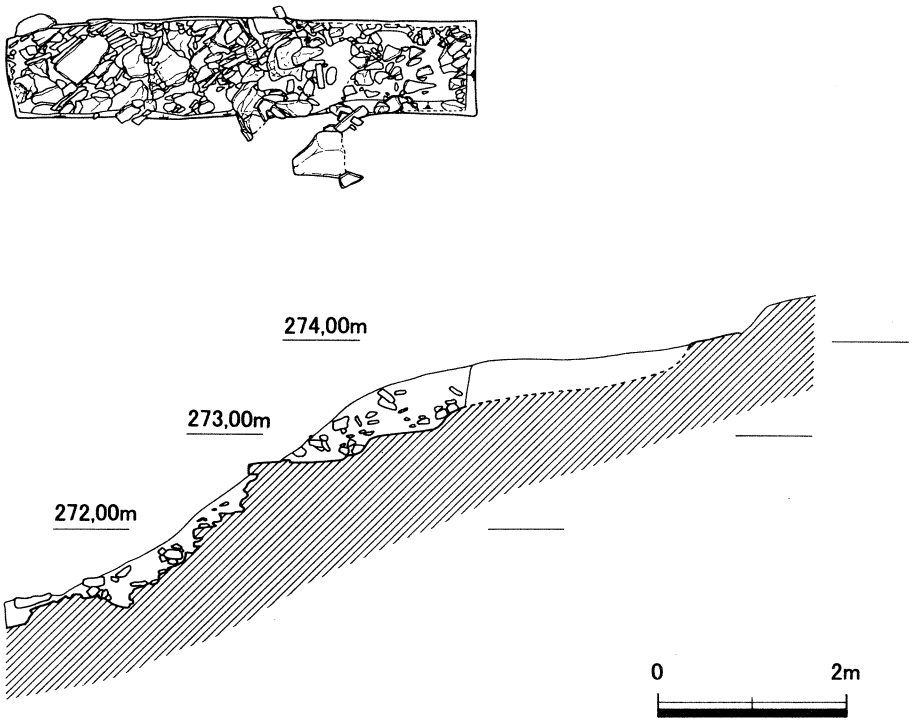
須恵器の甕体部片と思われる破片が１点出土しているが，体部片であるため細かな時期の特定はできない。調整は外面に格子タタキが明瞭に残り，内面は当て具痕が残る。焼成は良好である。

(2)　第２トレンチ

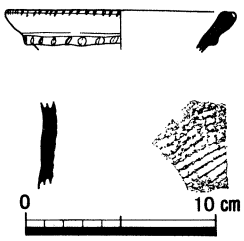
トレンチ設定場所は外郭線が屈曲したすぐ西側である。第１トレンチからは６０m西に位置する。外郭線の屈曲部を確認する目的で 5×５mのトレンチを設定したが，木の根が繁茂していたため，トレンチを狭く設定し南北５m，幅１mのトレンチを設定して調査を行った。平坦面の下部は深さ０．５０mで安山岩の岩盤に到達する。トレンチ内の土層は第１トレンチ同様，安山岩小礫と安山岩風化土である赤褐色土で充填されている。これらの埋土には版築を行ったような形跡は観察できなかった。斜面部はトレンチ北端では０．３０mの深さで流出した土塁の土が堆積するが，あまり堆積はみられない。標高２７２．５０m付近で石垣状にみられた石は岩盤であることが判明した。平坦面の南端では岩盤が露出していることから平坦面の下部では１６°の角度で傾斜していることがわかる。平坦面前面の傾斜角度の現況は３６°前後であるが，長年の土塁の流出と岩盤傾斜角度を考えると築造当初は４３°前後の傾斜で作られていたものと考えられる。

出土遺物

弥生土器が１点出土しているが，外郭線の築造及び継続時期を決める遺物の出土はない。出土した弥生土器は広口壷である。肥厚した口縁端部外面に刻目，口縁部外面のやや下がった部分に刻目突帯文を１条巡らす。口縁部の形態からすれば頸部は細頸になるものと思われる。口縁部の形態等から弥生時代中期後半と考えられる。



第48図　第2トレンチ平・断面図



第49図　第2調査地点出土遺物実測図

写真 10　第 1 トレンチ石列検出状況

写真 11　第 2 トレンチ完掘状況（北から）

写真 12　礎石建物跡検出状況

写真 13　集石遺構検出状況

写真 14　第 1 トレンチ完掘状況

写真 15　第 2 トレンチ完掘状況

報告書抄録

ふりがな	たかまつしないいせきはっくつちょうさがいほう
書名	高松市内遺跡発掘調査概報
副書名	平成１２年度高松市内遺跡発掘調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書
シリーズ名	高松市埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第５４集
編集者名	山元　敏裕
編集機関	高松市教育委員会
所在地	〒760－8571　香川県高松市番町一丁目８番１５号　ＴＥＬ 087(839)2636
発行年月日	平成13年 3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
たかまつじょうあと 高松城跡	たかまつしまるのうち 高松市丸ノ内 1丁目36番地	37201		34° 20′ 40″	134° 3′ 05″	H12.7.13 ～ H12.7.14	10㎡	ビル建設
すげさわなかのきれようせきあと 菅沢中の切窯跡	たかまつしすげざわちょう 高松市菅沢町 445番地	37201		34° 11′ 26″	134° 6′ 28″	H12.6.19 ～ H12.6.20	5㎡	道路建設
じんないじょうあと 神内城跡	たかまつしきたちょう 高松市木太町 1530-1番地	37201		34° 19′ 00″	134° 4′ 35″	H12.8.21 ～ H12.8.23	83㎡	防火貯水槽埋設
しせきてんねんきねんぶつやしま 史跡天然記念物屋島 第1調査地点	たかまつしやしまにしまち 高松市屋島西町 北嶺山上部 (国立公園内)	37201		34° 22′ 00″	134° 6′ 9″	H12.2.8 ～ H12.3.30	342㎡	基礎調査
しせきてんねんきねんぶつやしま 史跡天然記念物屋島 第2調査地点	たかまつしやしまひがしまち 高松市屋島東町 1821-1	37201		34° 21′ 24″	134° 6′ 15″	H12.3.5 ～ H12.3.30	18㎡	基礎調査

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
高松城跡	城館	江戸時代	礎石，井戸，溝 土坑，柱穴	陶磁器，瓦， 弥生土器	
菅沢中の切窯跡	窯跡	中世～近世	炭焼き窯		
神内城跡	城館	室町時代	溝，土坑，柱穴	須恵器，土師器 石製紡錘車	
史跡天然記念物屋島第1調査地点		古代	石列	須恵器，土師器 黒色土器，弥生土器	
史跡天然記念物屋島第2調査地点	城館	古代	土塁	須恵器，弥生土器	

高松市内遺跡発掘調査概報
平成１２年度国庫補助事業

平成１３年３月３１日発行

編集　高松市教育委員会
発行　高松市番町一丁目８番１５号
印刷　総合印刷ワークステーション(有)